紀要５１号

研　究　報　告　書

平成２６年３月

尼崎市立教育総合センター

はじめに

「教育の最大の環境は教員である」

学習指導要領に示された、心豊かな人間の育成、基礎・基本の重視、課題解決のための活用の力（思考力・判断力・表現力）の育成、自己学習力の育成、文化・伝統の尊重･･･といったねらいからもわかるように、求められている「あるべき教師像」はより質の高いものになってきている。これに応えるためには、先を見据えた、複雑で多岐にわたる教育課題にむけた研究および研修が必要である。

当センターでは、以前から尼崎市が抱える課題に向けた取り組みや長期的展望をもってさまざまな分野での研究を進めてきました。昨年度は国語科教育、社会科教育、算数･数学科教育、理科教育、外国語・英語科教育、教育の情報化、教育相談といった7部会で研究を進めてまいりましたが、従来の先進的な調査・研究に加え、より課題解決に近づけ学校現場に研究成果を活かすことをねらいとして部会を見直しました。その結果、教育相談・情報教育・基礎基本教育の三つの部会を「Ａ部会」とし、「活用する力」を意識した尼崎市独自の学習到達度調査問題作成・調査の部会を「Ｂ部会」として再編成しました。

「Ａ部会」では、喫緊の課題を盛り込んだ「教育相談部会」、学校に導入した校務支援システムのスムーズな活用に焦点を当てた「教育の情報化部会」、そして『ぐんぐんのびる個別ドリルシステム』の効果的な活用を検証した「基礎学力向上部会」の３部会で実践研究に取り組みました。

「Ｂ部会」では、学校教育課と連携し、尼崎市の児童生徒の学力における課題を探り、尼崎市独自の学習到達度調査問題の作成と実施、結果の分析をした後、一部の教科の指導アイデア例を作成しました。これらは、尼崎市教育委員会冊子のなかで報告します。次年度は、この結果にもとづいて、さらに研究員を募り、広がりと浸透につなげていく所存です。

いずれの研究も、学校における今日的課題を取り上げたものになっています。各学校・園をはじめ多くの方々にご高覧いただき、今後のそれぞれの取り組みの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本年度の研究を進めるにあたり、ご多忙にもかかわらず、指導助言いただいた専任講師の先生方に深く感謝申し上げます。また、校長先生方はじめ、熱心に取り組んでいただいた研究員の先生方、ご協力を下さったすべてのみなさまに厚くお礼を申し上げます。

平成２６年３月

尼崎市立教育総合センター
所長　佐藤　喜代子

目　　　　　次

1　基礎学力向上　…………………………………………………………　1
ぐんぐんのびる個別ドリルシステムを活用した，算数科における基礎学力の向上

2　教育相談　……………………………………………………………　17
予防的・開発的教育相談
― こころの居場所を考える ―

3　教育の情報化　…………………………………………………………　35
校務の情報化推進についての研究
― 校務の情報化に関する研修モデルの開発と検証 ―

基礎学力向上部会

「ぐんぐんのびる個別ドリルシステムを活用した，算数科における基礎学力の向上」

指導主事	細間　亜季	
〃	仁科　良久	
研究員	守屋　貴哉	（浜田小）
〃	入江　伸弥	（立花西小）
〃	小寺　茉利絵	（水堂小）
〃	笠井　美香	（武庫東小）
〃	安部　美佳	（園田小）

【内容の要約】

尼崎市の児童生徒の学力向上について考えるとき，「読み，書き，そろばん」に代表される基礎学力の定着は必須のものである。尼崎市では，平成１９年度より「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム（以下，「ぐんぐん」)」の運用を開始した。これは，漢字と計算について，個々の学習状況に応じた習熟を可能にしたシステムであるが，近年は，素点の入力に関する事務作業量や，印刷費などの費用面の問題から活用が滞っている。

しかし，「ぐんぐん」においては，過去の本センターの研究から，基礎学力向上における学習効果については明らかにされている。

そこで，本年度は学力層に応じた「ぐんぐん」の活用効果を足掛かりに，「ぐんぐん」活用による新しい可能性について考察をした。

キーワード：得点率分布図，算数科，特別な支援を要する児童，少人数指導，個別学習

1　はじめに ………………………………… 1

2　研究の概要 ………………………………… 2

3　一斉学習における「ぐんぐん」の効果と，算数科の学力向上について ………… 4

4　個別学習における「ぐんぐん」の効果と，活用方法について ………………… 10

5　学力上位層を含めた，基礎学力の向上について ………………… 13

6　研究のまとめ ………………………………… 16

１　はじめに

本市において「学力向上」の取り組みが始まってから久しい。また，公表されている学力調査等の結果から，その成果が現れてきていることがうかがえる。

一方で，時代の変遷とともに，「基礎的，基本的事項の確実な定着」から「活用力の育成」へ，また，「学力低位層への支援」から「ボリュームゾーンへの学力保障」へと，学力向上施策においての力点が変化してきている事実がある。

このような取り組みの中で，本市では平成１９年度よりネットワークを通じて『ぐんぐんのびる個別ドリルシステム』の運用を開始した。これは，漢字の読み書きと計算の力を習得するために，主に習熟度に応じた個別問題プリントを印刷するものである。

教育総合センターの過去の研究でも，活用方法や効果の検証等についての研究が行われ，基礎的基本的な力の定着や，関心意欲の向上に効果があることが実証されてきた。

今年度は，これまで行われてきた活用法に「ボリュームゾーンへの対応」という視点を加えて，学力向上の方向性を探りたいと考えた。

２　研究の概要

（１）研究テーマ

『ぐんぐんのびる個別ドリルシステム』を活用した，効果的な学力向上について

（２）題材設定の理由

平成１９年度から実施されている「全国学力・学習状況調査」をはじめとして，マスコミ等では，学力を測る基準として「平均点」が取り上げられることが多い。

しかし，「平均点」には様々な側面がある。次のような極端な例示をもとに考えてみる。

「１組」

A	B	C	D	E
１００	１００	４０	４０	０

「２組」

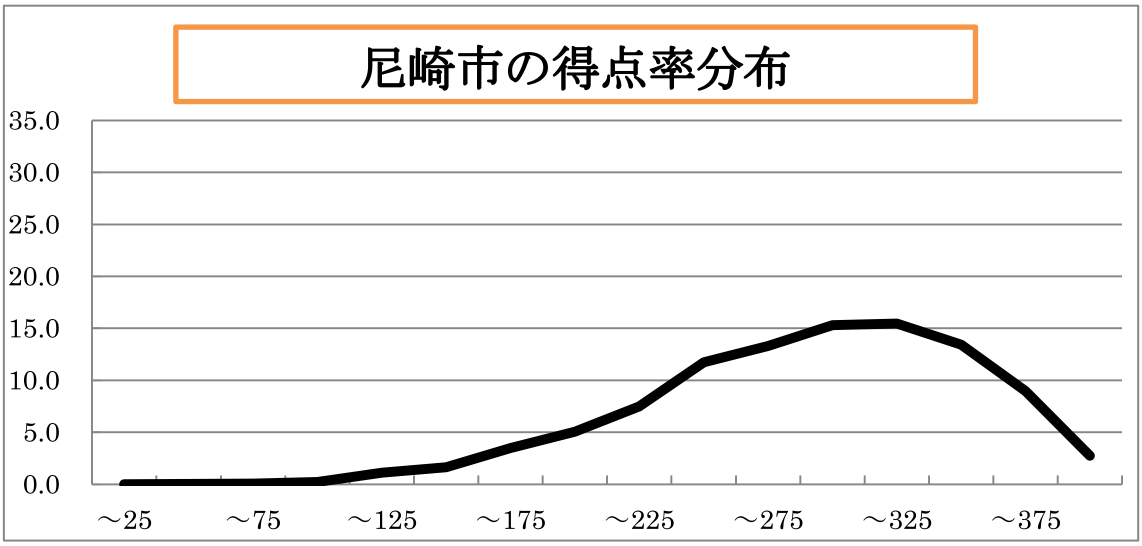
A	B	C	D	E
６０	６０	６０	６０	４０

上記の二クラスにおいて，平均点はどちらも５６点である。

しかし，「児童個人レベルでの学力」は，同じだとは言えない。もちろん，対象の母数が多くなると，均質化してくると思われるが，学年や学級といった対象に関しては注意が必要である。

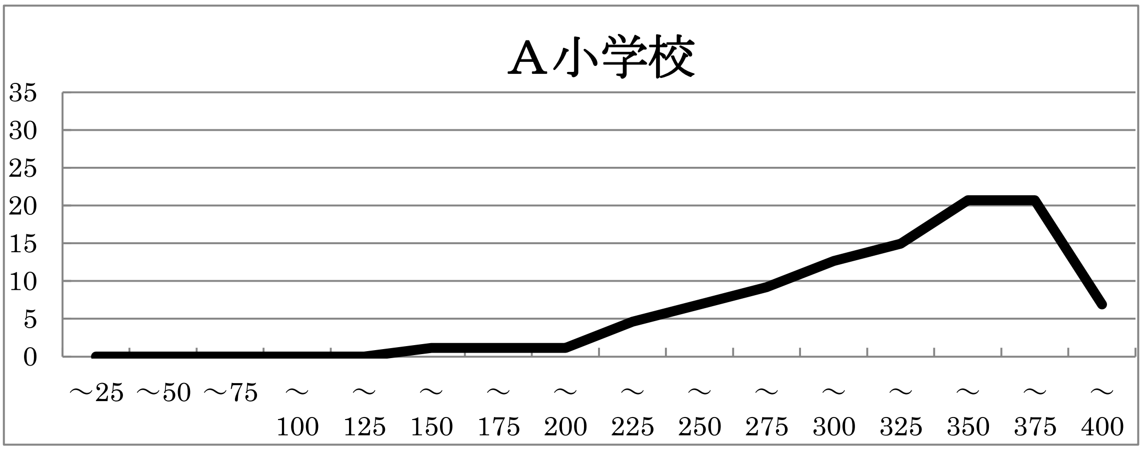
この例示から考えても，平均点が高いことが，その集団が『一様に』高い学力を有することを表すのではないことは，明らかである。

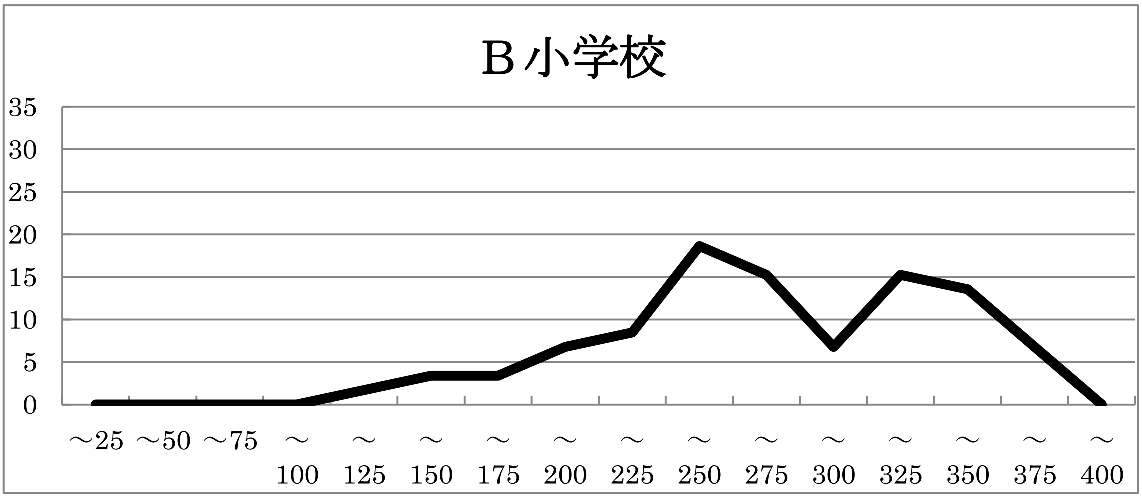
ここに，平成２３年度に行われた「尼崎市立小・中学校　学力・生活実態調査」の結果がある。

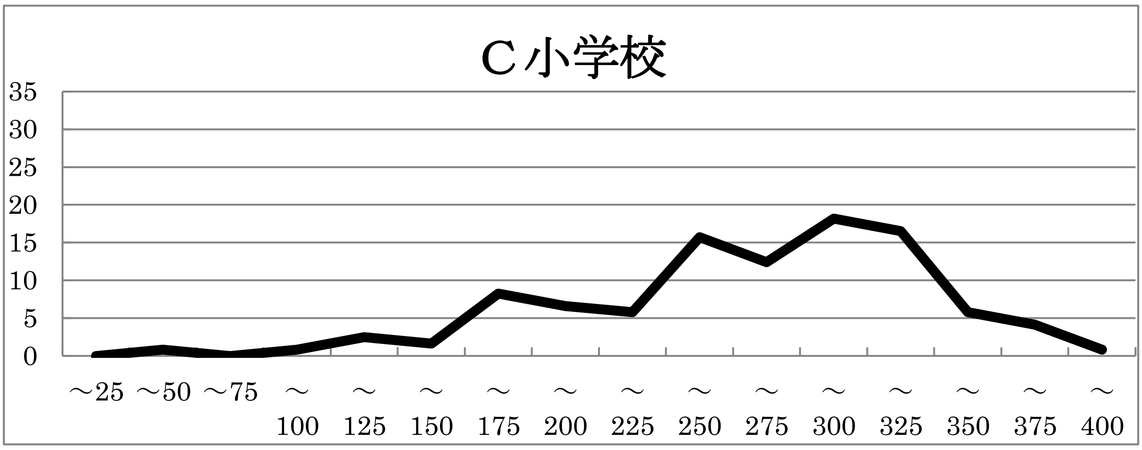


この表をみると全市的な傾向としては，得点率が約８０％を頂点とした正規分布に近い結果であることが分かる。

しかし，個々の学校レベルで見たとき，大きく分けて，次のＡ小学校，Ｂ小学校，Ｃ小学校のような得点率分布状況の特徴的なパターンが見られることがわかった。







Ａ小学校のパターンには，高いレベルでの正規分布が表れている。いわば，学力向上のめざす理想型である。しかし，このようなパターンを示す学校は市内数校に限られている。

次に，Ｂ小学校に代表されるパターンをみると，いわゆる「二山型」と言われる得点率分布になっている。このパターンは，生活環境要因や，通塾率などの影響も併せて「学力の二極化」を表す型と言われることが多い。

市内小学校においても，約半数の学校がこのパターンになっている。

最後に，Ｃ小学校のパターンのように，山が３つある「三山型」が存在する。このようなパターンの分布を示す学校が，市内の小学校の２割弱に上ることが分かった。

そこで，本部会では，このような，得点率分布図のパターンに着目して「学力向上」を考えることとした。そして，各校がどの山に属する児童にスポットを当てるかを考えることにより，効果的な学力向上を図ることができるのではないかと考えた。

また，本年度は「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の活用について，従来のような一斉学習に加え，個別学習や学力補充を中心とした活用を含めた可能性について研究を進めたいと考えた。

その上で，実証検証を行っていくための研究仮説を立てることを目標として，調査事例から学力向上への取り組みにおける，「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」（以下，「ぐんぐん」）の活用効果について考察することとした。

（３）研究の方法

本年度は，重点教科として算数科を設定した。これは，計算問題を中心とする「ぐんぐん」の特長を十分に活かす目的がある。

次に，調査内容に基づいて，３つのグループ分けを行った。

１つ目のグループは，低学年の「式と計算」領域を中心に，一斉学習における「ぐんぐん」の活用効果について調査研究する。

２つ目のグループは，高学年において学力低位層の児童を対象に，個別指導における「ぐんぐん」の効果について調査研究する。

３つ目のグループは，非常に高い学力を有している学校の学力向上の取り組みをもとに，「ぐんぐん」活用の可能性について考察をすることとした。

３　一斉学習における「ぐんぐん」の効果と，算数科の学力向上について

（1）調査事例　その１　「ぐんぐん」の活用と，児童の学力向上について

１.調査する内容について

低学年３クラスを対象に５月から１１月までの期間,週２回のペースで継続的に「ぐんぐん」を活用した。その中で，個別ランクの上昇に着目し,「ぐんぐん」の活用との関連性について，考察した。

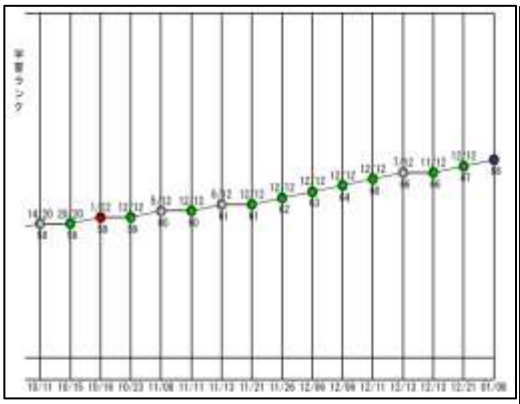
２.児童の様子

５月から帯時間を利用して継続実施してきた。そのため，児童には個別ドリルを行うことへの抵抗感は少ない。むしろ，児童の意識の中で，日常の学習活動として定着していると考えることができる。

また，継続期間の長期化に伴い，個人の学習進度における差が広がったが，他の児童と自分を比較して，進度について気にする様子は見られなかった。

３．算数科の学力上昇と「ぐんぐん」内のランク上昇について

この調査の中で，算数科の学力上昇がもっとも大きかった児童は，ボリュームゾーンの「少し下」の児童であった。つまり，学力の「中の下位層」の児童に対して最も効果が見られた。



日時	ランク	ランク名	得点	結果
10/11 17:34	ランク58	[まとめ] 6　100より大きい数をしらべよう　(ランク52~57)	14/20点	ふごうかく
10/15 17:06	ランク58	[まとめ] 6　100より大きい数をしらべよう　(ランク52~57)	20/20点	ごうかく
10/16 18:31	ランク59	3つの 数の たし算　(2けた) + (何十) + (何十)	1/12点	ふくしゅう
10/23 16:00	ランク59	3つの 数の たし算　(2けた) + (何十) + (何十)	12/12点	ごうかく
11/08 7:56	ランク60	3つの 数の たし算　( ) を つかう　2けたまで	5/12点	ふごうかく
11/11 7:53	ランク60	3つの 数の たし算　( ) を つかう　2けたまで	12/12点	ごうかく
11/13 19:01	ランク61	たし算の くふう　(2けた) + (1けた)	8/12点	ふごうかく
11/21 20:37	ランク61	たし算の くふう　(2けた) + (1けた)	12/12点	ごうかく
11/26 17:28	ランク62	ひき算の くふう　(2けた) - (1けた)	12/12点	ごうかく
12/06 7:56	ランク63	[まとめ] 8　計算のしかたをくふうしよう　(ランク59~62)	12/12点	ごうかく
12/06 16:50	ランク64	たし算　2けた　10のくらいに くりあがりあり	12/12点	ごうかく
12/11 16:52	ランク65	たし算　2けた　くり上がり2回	12/12点	ごうかく
12/13 6:01	ランク66	たし算　2けた　1のくらいが くり上がって 10のくらいが く	7/12点	ふごうかく
12/13 17:48	ランク66	たし算　2けた　1のくらいが くり上がって 10のくらいが く	11/12点	ごうかく
12/21 14:07	ランク67	たし算　(1けた) + (2けた) = (3けた)　または　(2けた	12/12点	ごうかく
げんざい	ランク68	ひき算　(3けた　199まで) - (2けた)　10のくらいに -		

上記のグラフ及び表は特徴的な一例である。児童が毎回順調にランクアップしているのではなく,「不合格」→「復習」→「合格」,「不合格→合格」というサイクルを繰り返している。さらに，この層の児童には一様に「ぐんぐん」活用に関する意欲関心の高さがうかがわれた。

一方で，学力低位層及び学力上位層の児童においてはランク上昇と，学力上昇に極端な相関関係は見られなかった。また，この層の児童は「ぐんぐん」活用に対する意欲関心も高くはないことが分かった。

（2）調査事例　その２　「ぐんぐん」の活用と，算数科の成績推移について

１.調査する内容について

低学年２クラスを対象に週２回のペースで継続的に「ぐんぐん」を活用したクラスと，全く活用しなかったクラスで成績推移の比較を行った。活用しなかったクラスでは，共通のプリントや計算ドリル等を使って家庭学習及び帯時間の学習を行った。

比較の方法として，１学期に学習した「数と計算」領域について，「技能に関する問題」「思考に関する問題」についてのテストを作成した。これを，９月と１１月に実施し，成績推移について分析を行った。

２．「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の活用と，成績の推移について

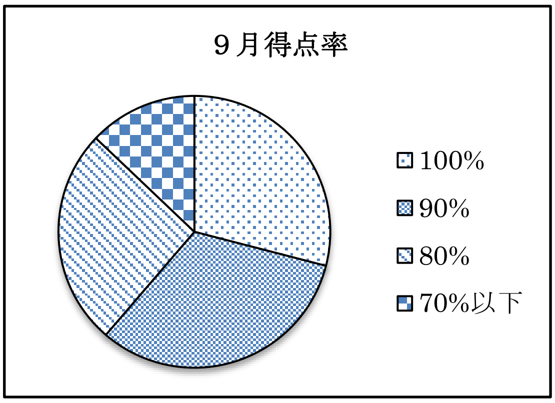
ここでは，２つのクラスの９月と１１月のテストにおける「平均点」と「得点率分布」を比較した。

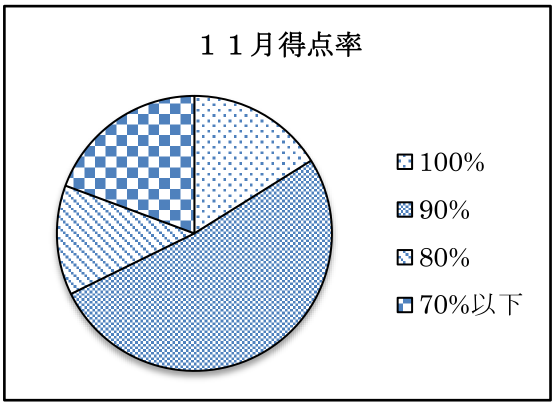
また，「個人の成績推移」を併せて考察し，「ぐんぐん」の活用効果を分析した。

①「技能に関する問題」について

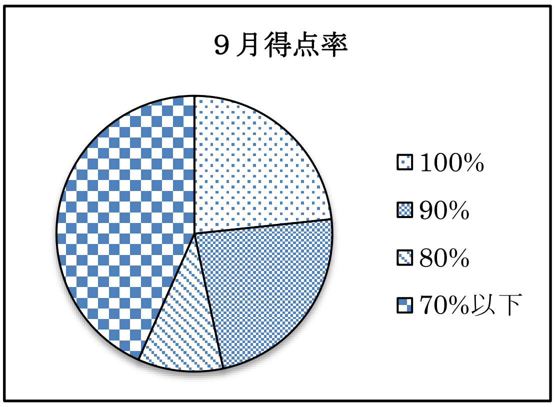
次のグラフは，２つのクラスの，「数と式領域」における，四則計算の技能に関する問題の得点率を９月と１１月で比較したものである。

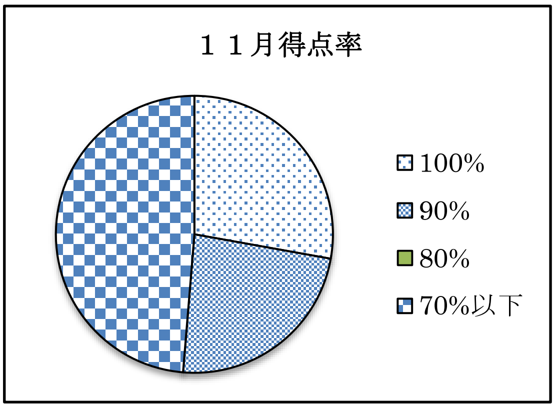
「クラス平均点」では，９月のテストでは「ぐんぐん」を活用したクラスが，１６ポイント近く上回っていた。これは，本センターの過去の研究からも，「ぐんぐん」の活用による効果が高いと考えられる。





（「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用したクラス）





（「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用しなかったクラス）

はじめに，「ぐんぐん」を活用しているクラスでは，得点率１００％の児童は減少しているが，７０％以下の得点率の児童も減少している。結果として，平均点は２．６ポイント下降したが，低位層の児童は減少した。

次に，「ぐんぐん」を活用しなかったクラスでは，８０％台の得点率の児童半数ずつが９０％台と７０％以下に振り分けられた。その結果，得点率が二極化し学力低位層の児童が増えた。しかし，満点の児童も増えていることから，平均点は約４ポイント上昇し，「ぐんぐん」を活用したクラスとの差は，１０ポイントに縮まった。

次の表は，個々の児童の得点率の推移を分析したものである。

９月の得点率が１００％の児童をＡグループ，９０％台であった児童をＢグループ，８０％台であった児童をＣグループ，７０％以下であった児童をＤグループとし，それぞれのグループの児童が，１１月にはどのような得点率を記録したのかを表したものである。

	＋20%	＋10%	0	－10%	－20%	得点を維持，上昇させた児童の割合(%)
A			22.2	55.6	22.2	22.2
B		50.0	0.0	50.0	0.0	50.0
C	7.7	38.5	46.2	7.7	0.0	**92.3**
D	14.3	14.3	0.0	0.0	**71.4**	28.6

（「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用したクラス）

	+30% 以上	+20%	+10%	0	−10%	−20%	−30% 以上	得点を維持，上昇させた児童の割合(%)
A				71.4	28.6	0.0	0.0	**71.4**
B			42.9	14.3	0.0	0.0	**42.9**	57.1
C		0.0	33.3	0.0	66.7	0.0	0.0	33.3
D	23.1	23.1	15.4	7.7	23.1	0.0	7.7	**69.3**

（「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用しなかったクラス）

上記の表から，「ぐんぐん」活用の有無によって，個人の得点率の推移に大きな違いがあることが分かる。

「ぐんぐん」を活用したクラスにおいて，最も得点率を伸ばしているのはＣグループの児童である。つまり，得点率分布で考えると山の少し左の，いわゆる「中の下位層」の児童である。この結果は，「調査事例　その１」の結果と一致する。

一方で，Ｄグループの児童においては，得点の伸びが見られなかった。また，満点を維持できた児童の数も減少している。

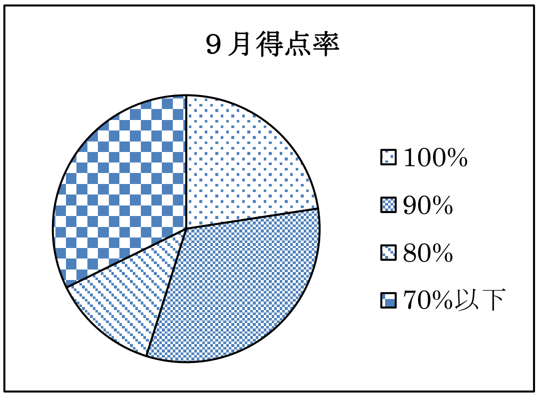
これに対し，「ぐんぐん」を活用しなかったクラスでは，Ａグループと，Ｄグループの児童が得点率を維持または上昇させた。

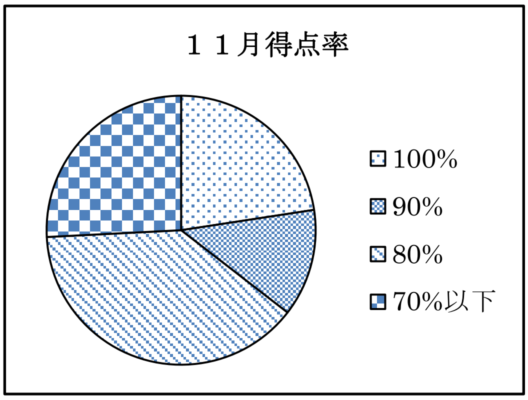
一方で，Ｃグループの児童が得点率を下げ，Ｂグループの児童は大幅に得点率を下げた。

②「思考に関する問題」について

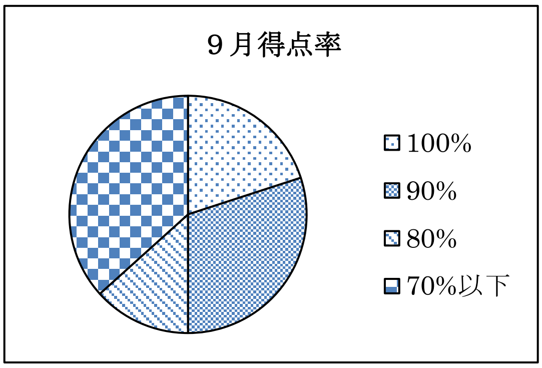
「思考に関する問題」とは，「『数と式』領域における，算数的思考に関する問題」を表し，この領域における活用的な文章題等の問題である。このテストにおける，「得点率」「平均点」及び「個人の成績推移」についてグラフ化し分析した。

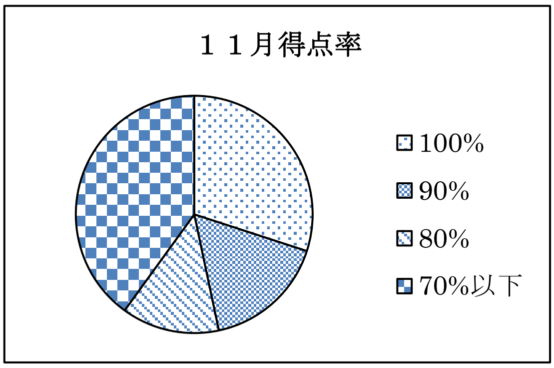
はじめに平均点では，９月にテストを実施した時点では，「ぐんぐん」を活用したクラスが，５ポイント上回った。「思考に関する問題」については，「技能に関する問題」と比較して，平均点に大きな差は見られなかった。





（「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用したクラス）





（「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用しなかったクラス）

次に，「ぐんぐん」を活用したクラスでは，９０％台の得点率の児童は減少したが，得点率８０％台の児童が増加した。その結果，クラスの平均点は１０ポイント上昇した。

一方，活用しなかったクラスでは，９０％台の得点率の児童が減少したが，満点の児童が増加した。そして，得点率７０％以下の児童の数に変化は見られなかった。その結果，クラスの平均点の上昇は５ポイントにとどまった。

以上の分析から，「思考に関する問題」においては，クラス全体としての得点率分布に，大きな違いは見られなかった。「ぐんぐん」を活用したクラスは平均点が１０ポイント上昇し，活用しなかったクラスでは得点率が５ポイント上昇したため，２クラスの平均点の差は１０ポイントに広がった。

次の表は，９月の得点率が１００％の児童をＡグループ，９０％台であった児童をＢグループ，８０％台であった児童をＣグループ，７０％以下であった児童をＤグループとし，それぞれのグループの児童が，１１月にはどのような得点率を記録したのかを表したものである。

	+30% 以上	+20%	+10%	0	−10%	−20%	−30% 以上	得点を維持，上昇させた児童の割合(%)
A				42.9	28.6	28.6	0.0	42.9
B			0.0	25.0	50.0	0.0	25.0	25.0
C		16.7	33.3	33.3	16.7	0.0	0.0	83.3
D	20.0	0.0	50.0	20.0	10.0	0.0	0.0	90.0

（「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用したクラス）

	+30% 以上	+20%	+10%	0	−10%	−20%	−30% 以上	得点を維持，上昇させた児童の割合(%)
A				50.0	16.7	33.3	0.0	50.0
B			50.0	10.0	20.0	0.0	20.0	60.0
C		66.7	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	66.7
D	20.0	20.0	10.0	0.0	40.0	0.0	10.0	50.0

（「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用しなかったクラス）

「ぐんぐん」を活用したクラスでは，得点率８０％以下の児童のほとんどが得点率を上昇させたことがわかる。

これに対し，「ぐんぐん」を活用しなかったクラスでは，全てのグループで二極化が進み，得点率８０％以下の児童については，その様相が顕著であった。

３．「ぐんぐん」に関する意識調査

最後に，「ぐんぐん」を活用したクラスの児童を対象に，筆記による意識調査を行った。

記述内容を分析した結果，次のような回答が多数を占めた。

・新しい問題に出会いたい	３９％
・どんどんランクを上げたい	３５％
・計算の速度を上げたい	２３％
・コメントが楽しみ，やる気につながった	１６％

また，具体的な，記述内容については，次のような回答が見られた。

・難しい方の引き算（繰り下がりが２回必要な引き算）もあったが，**家で練習してやっとできるようになった**。九九の学習も楽しみだ。

・**コメントが変わるのが，楽しみだった。**

・**ぎりぎりでランクが上がらなかったときが，一番悔しかった。**

・ぐんぐんでは，１学期に学習した引き算が出てきた。**復習ができて良かった。**

（下線は筆者）

以上のような結果から，児童が積極的に「ぐんぐん」を活用していたことが分かる。

児童は，新しい問題に出会うことや，ランクを上げることから，高いモチベーションを得ていることや，そのために自主的に家庭学習や復習を行っていたことが分かった。

（３）考察

ここでは，「調査事例　その１」と「調査事例　その２」を元に，「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」と学力向上について考察することとする。

１．得点率分布状況の重要性について

ここで述べることは，「得点率分布状況の変化に着目することで，集団の学力について，より正確に把握することができる」ということである。

学力向上の目標が「どの子もできる」「できない子をなくす」ことだとするならば，得点率分布状況は，はじめに述べた「Ａ小学校」のような正規分布に近い型になることが望ましい。その上で，「曲線の左端」つまり最低得点率の児童の得点率を，目標とするレベルまで引き上げることが必要となる。

次に，クラスの得点率分布が「二山型」になっている場合は，学力低位層への支援

を充実させることにより，正規分布に近づけていく必要がある。また,「三山型」の得点率分布である場合には，中間層を上位層に引き上げるか，低位層を中間層に引き上げるかを考えて学力向上方策を練る必要が生じる。

また，学習終了時に正規分布を示していたとしても，期間を置くと学習内容を忘却し,「二山型」に移行することがある。平均点で評価をすると，それほど大きな変化がなくとも「支援を必要とする学力層」の児童が増加している可能性も考えられる。

2.得点率分布状況に応じた学力向上の方向性

先に述べたとおり,「三山型」「二山型」「正規分布」は，学習内容や時間の経過とともに移り変わる。したがって，その時々で集団の学力を適切に判断し，支援の方法を考えていくことが必要となる。

その方策の一つとして,「ぐんぐんのびる個別ドリル「ぐんぐん」」の活用を考える。

「調査事例　その１」の結果より，一斉学習の場の中で「個別ドリル」を活用することは,「いつ，だれが，何を，習得しているのか」に対し，的確に対応することがわかる。また，いわゆる「中の下位層」に対して，大きな成果をもたらすことも分かっている。

では，なぜ「個別ドリル」が，この層の児童に対して成果を上げるのだろうか。それは,「中の下位層」の児童が「わかりかけている子」「わかったつもりでいる子」「わかっているふりをしている子」等であるためではないだろうか。

このような児童は,「何がわからないのか」について，自分では判断できないことが多い。また,「どこがわからないのか」についても，個人差が大きいと考えられる。

したがって,「ぐんぐん」の特性である「それぞれの実態に応じた個別にプログラムを作成できること」が，大きなメリットとなると考える。

次に，この層の児童にとって「学習へのモチベーションを維持すること」は，学力の向上に重要な要素だと考える。この層の児童の「学力の獲得状況」は，非常に不安定であり，定着に向けての努力の継続が不可欠である。しかし,「努力してやっとできた」「努力して何とかできた（気がする)」「できるようになったと思い（込み）たい」という児童にとって，更なるモチベーションを獲得していくことはとても難しい。

これについては,「ぐんぐん」の「努力すればランクが上がる」「状況に応じてコメントが変わる」といった特長は，児童のモチベーションの維持に役立つと考える。

以上のようなことから,「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」は,「中の下位層」に有効であると考えられる。

４　個別学習における「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の効果と，活用方法について

（1）調査事例　その３　学級における特別な支援を要する児童の支援について

1.調査する児童について

調査対象児Ｓ（以下「Ｓ」）は，小学校５年生である。全般的に学習の遅れがあり，学習に対する意欲が低い。また，家庭での学習支援が不足しており，不登校になりが

ちである。

５年生進級時，算数科については，加法（繰り上がりなし）までは理解していた。

Ｓの在籍クラスでは，ほぼ毎日「ぐんぐん」を活用しており，Ｓ以外の児童については一斉学習の形態で個別ドリルを実施した。

そこで,「ぐんぐん」の個別設定を活用し，Ｓの学力に応じた個別ドリルを作成し，実施した。また，学習機会の公平性等を考慮し，該当学年の学習内容の個別ドリルも併用して実施した。

「ぐんぐん」の活用前は，他校で実践を行っている習熟度別ドリル等を活用していた。しかし，学力向上に対する意欲が持続せず，効果も上がらなかった。

そのため，５月末より「ぐんぐん」を活用した学習を取り入れた。

活用の方法として,「該当学年のプリント」と「学力状況に応じたプリント」を二枚印刷し，クラスの他の児童と同じ時間に実施した。これは，学習機会の公平性を考慮するとともに，該当学年相当の内容にもＳが正答できる問題があり，そのことが意欲の喚起に大きな効果が認められたためである。

「学力状況に応じたプリント」については，ランクを第１学年にして，解答を下欄に付与する設定で,「個別ドリル」を印刷して行った。

また，復習事項についてはマンツーマン対応を行い，ポートフォリオ形式で学習成果を保存した。

２.活用の実態

「ぐんぐん」活用開始当初は，学習意欲が低く不合格を繰り返し，ランクも上がらなかった。

しかし，復習事項に対する個別指導や，宿題の配布等の支援を続ける内に，徐々にランクの上昇という形で，結果が表れてきた。

また，学習ランクが細かく設定されているため，理解の状況や学習の進度に応じて学習の積み上げが進むにつれ，学習に対する意欲にも改善が見られた。ただ，積極的に学習に取り組むという姿勢には至らなかった。しかし，学習に対する遅れを取り戻そうという意欲は見られた。

（２)調査事例　その４　放課後学習等の個別指導を要する児童の支援について

１.調査方法

週１度（木曜日）の放課後に，３０分間程度，５・６年生児童２２名（各クラス５～６名程度）について,「ぐんぐん」の画面ドリルを用いて学力の向上を図った。個人指導を行ない，高学年の算数科における基礎学力の向上と，家庭学習習慣の確立の補助を目標とした。

放課後学習の対象児童は,「担任による指名」「児童の意志」「保護者の了解」の３つの条件を満たした児童とした。

また，７月と１月に同一問題による調査問題（２５問／３０分間）を行ない，学習状況を調査することとした。

2．活用の実態

「ぐんぐん」の画面ドリルを活用した要因には，個々の進度にあった学習課題を児童に提供できることがある。また，「ぐんぐん」の使用にあたって，紙資源の節約等の個人指導に関わる経費の節約も原因のひとつである。

「ぐんぐん」の活用により，コンピュータ室の端末を利用し，画面ドリルを活用することで効率的かつ経済的な個別指導が可能になった。

７月に行った調査問題では，受験者２１人中３３．３％の児童が，調査問題を完結することができなかった。

しかし,「ぐんぐん」を活用した放課後学習は参加率が高く，５年生では平均８０％，６年生では平均７８．２％の出席率であった。

その結果，１月の調査では得点を伸ばした児童は約６３．６％に止まるも，全員が調査問題を完結するという結果が出た。

以上のことから，画面ドリルを用いた「ぐんぐん」の活用により，児童の学習への意欲を高める効果はあったと考える。また，継続的に個別学習を行うことにより「学習機会の保障」や「学習の習慣化」についても一定の効果があったと考える。

本年度は，諸処の事情により，十分な実施回数を行うことができなかったが，活用のための体制の整備はできたように感じる。

さらに，内容に工夫を加え，来年度からの実施に備えたい。

（３）考察

ここでは，以上の２つの調査事例から，個別学習における「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の効果と，活用方法について考察を進めることとする。

「学習において特別な支援を要する児童」については,「ぐんぐん」を活用する際にも個別指導等の必要がある。これは,「ぐんぐん」は復習の必要性は示すが，問題の解き方までは表示しないことが原因である。また，これらの児童は，学習に対する意欲が低いことが多く，学力を向上させようというモチベーションも不足している。

この原因の一つとして，一斉学習の形式では，自分と他の児童との差を実感することが多く，劣等感や失望感を感じるためだと考える。しかし,「ぐんぐん」は個別ドリルなので基本的に全員別の課題を行うことになる。したがって，自分と他の児童との比較を気にすることなく，自らの課題に取り組める。

一方で，ランクの上昇というそれぞれの課題に応じた評価基準で，達成感を共有できるという効果も期待できる。

また，解答付きの問題紙の印刷や，画面ドリルの活用により，即時的な評価が可能である。このことは，注意力や学習意欲の持続が困難な児童に対して，これらを持続させることに効果的なのではないかと考える。

これらのことから,「ぐんぐん」を活用することで「自ら学習を進めることのできる児童」と「個別的な支援を必要とする児童」の見極めを早期に行ない，それぞれに適切な学習課題を設定することができると考えられる。さらに，学力差によるモチベーションの低下を防ぎ個々の学習状況に応じた達成感を感じることができるという効果が期待できると考える。

５　学力上位層を含めた，基礎学力の向上について

ここでは，学力上位層を含めた，基礎学力の向上について考察を進める。

まず，最初の問いとして「学力上位層の児童にとって，身につけるべき基礎学力とは何か」について考えたい。

本研究の中で「学力上位層の児童」については「ぐんぐん」の効果が見えにくいということが明らかになりつつある。

そこで，非常に高い学力を維持しているＤ校の事例をもとにして，「学力上位層の児童」に対する，基礎学力向上方策について考察を進めた。

（1）調査事例　その５　学力上位層に対する，基礎学力向上方策について

1．調査する学校の取り組みについて

Ｄ校は，尼崎市立小・中学校学力生活実態調査において，市内でも高いレベルの平均得点率を記録している。また，得点率分布においても正規分布を示している。

校内の取り組みとして，「学力向上アクションプラン」を実施している。具体的には次のような実践を行っている。

・朝の読書タイム（１０分間）
・昼のステップタイム（１０分間）
・放課後指導（１～１．５時間）
・漢字・計算検定試験
・家庭学習の工夫

また，職員会議等の会議の精選を行ない，教職員が児童の学びを支援するシステム作りを行っている。

2．取り組みの内容

先に述べた「学力向上アクションプラン」の内容については，市内の他の学校でも取り組まれているものである。

では，なぜＤ校の児童が突出した学力を身につけているのだろうか。

Ｄ校の取り組み内容から，考察を進めることとする。

①朝の読書タイム

Ｄ校では，毎朝１０分間の読書活動を実施している。

この時間，児童はマンガ，雑誌以外の好きな本を一冊読み，読書以外の活動は一切行わない。私語は禁止で，児童は１冊の本を読み切ることを目標としている。

また，この時間は担任が教室におり，読書タイム終了後続けて１校時の学習に入る。

朝の読書タイムで読む本については，児童が常に机に入れており，この時間以外にも，読書をする習慣が身についている。

学校が実施した児童対象アンケートでは，どの学年も７割以上の児童が朝の読書タイムに集中している」と回答している。また，１学期終了時に，集中できていると回答した児童の割合が低い学年についても，夏季休業中に対策を講じるといった取り組みを行っている。

②昼のステップタイム

毎日，午後１時４０分から５０分までの１０分間,「計算の力をつけること」を目標に実施している。その中で，学校独自に作成した問題を使用し，四則演算を基本とした計算問題を「５分間で１００問」行う。

児童は, ステップタイム開始前に着座し, 開始時刻と同時に全校で一斉に実施する。

この活動についても，各学年平均８割以上の児童が「集中してできている」と回答している。

また，毎学期の終わりに「漢字，計算検定試験」を行なう。「漢字検定試験」については，２０分間で５０問（年度末は１００問),「計算検定試験」は１０分間で１００問の独自に作成した問題を行う。

結果については，得点率９６％以上（３～６年生は９８％）をＡ認定，８０％以上（３～６年生は９０％以上）をＢ認定とし，年度末の得点率が９８％以上の３年生以上の児童には特Ａ認定が行われる。

平成２４年度末の計算検定試験で，６年生では９９％の児童が特Ａ認定，残りはＡ認定という結果を残している。また，漢字検定試験においても，６年生で９割の児童がＡ認定を，また，全校児童の７割以上の児童がＡ認定を受けている。

③放課後学習，家庭学習

放課後学習については，その日の授業で，理解が不十分だと思われる児童，前日の家庭学習が未完結の児童を中心に，一日平均５～６名程度を対象に行う。

実施は, 毎日, 終業後から午後４時１５分までとし, 補習及び再テストなどを行う。

このため，会議を精選し，研究協議会等の特別に必要な場合は午後４時３０分以降の開始としている。

家庭学習については，全学年で「音読，計算，漢字学習」の３つを基本セットとし，これに加え自由学習などの，独自の家庭学習を設定する学年もある。

内容については，昼のステップタイムと同程度の独自作成問題を使用する。

また，完全に定着させるために，同じ問題，同じプリントを繰り返し使用することもある。

一方で，平成１８年度より基本的生活習慣の確立を目指し,「がんばりノート」を作成し，生活習慣と家庭学習を評価する活動を継続している。

３. 考察

Ｄ校の実践から，児童に「学習に対する意識」「確かな基礎的，基本的スキル」，そして「学習を継続する体力」の３つが育まれているのではないかと考える。

はじめに,「学習に対する意識」について考察する。

日々の取り組みについては，他の小学校でも実践されているものであるが，Ｄ校においては，それぞれの取り組みを徹底させている実態がある。これは，学校のシステムを始めとして，教職員の意識にいたるまで，児童の学力向上についての意識が統一されていることが感じられる。

これが，児童の学力向上において教員の「学力向上に対する意欲，関心」や「学習

内容」に系統性を生み出していると考える。

また，児童についても定時着席や，読書用図書の保持率，検定試験結果等に，「学習に対する高い意識」が伺える。

次に，「確かな基礎的，基本的なスキル」と「学習を継続する体力」について考察する。

Ｄ校の取り組み内容で，特に注目すべき点として「実施時間と問題数」がある。実際に，毎日，ステップタイム及び家庭学習で課される問題数は，計算だけで１００問程度，これに漢字練習と音読が加わる。これが，６年間，毎日継続することを考えると，その積み上げについては大きな成果となることは想像に難くない。これにより，学習に必要な「確かな基礎的，基本的なスキル」を身につけていると考える。

しかし，出題内容については「徹底した四則演算の反復」「漢字練習」「音読」である。このことが「活用型」の出題構成を主とする「学力生活実態調査」の得点にどのようにつながるのだろうか。

一つの仮説として「学習を継続できる体力がついている」ことを挙げたい。

Ｄ校で，毎日家庭学習に使用されるプリントには，１００問近くが出題される。週末ともなると，その数は倍になる。視覚的な文字情報だけでも，かなりの量になることが想像できる。そして，この課題を毎日行ない，理解が不十分であったり，何らかの事情で完結できなかったりした時には，放課後学習で補充が行われる。

このような活動を継続することで，Ｄ校の児童には，かなりの「学習を継続できる体力」が身についているものと考える。

また，多くの文字情報を処理する経験を重ねることで，「読み続ける力」もつくと考える。学力生活実態調査の分析結果の中で，無回答率の高さが大きな課題となっている。この原因の１つが，問題を最後まで読み続ける体力の欠如だとしたら，Ｄ校の学力の高さも納得できる。

実際に，３年生のあるクラスでの口頭調査で，「あなたは，宿題（計算問題）がどのくらい出たら『今日の問題数は多い』と感じますか？」という質問に対して，６２．５％の児童が２００問以上と回答し，１００問以下と回答した児童は一人もいなかった。

以上より，Ｄ校では，学校の教育課程を貫く「学習に対する意識」と，徹底した反復練習により培われた「確かな基礎的，基本的スキル」を礎にして，「学習を継続できる体力」を原動力に，学力向上が進められていると考える。

これまで，「ぐんぐん」の活用効果について調査を行ない，「学習に対する意識」と「確かな基礎的，基本的スキル」の定着についての効果は，明らかになった。

しかし，「ぐんぐん」を活用することで，「二山型」や「三山型」が解消されて「正規分布」に近づいた後，さらに，学力上位層を含めた基礎学力の向上を試みるとき，新たな学力向上方策が必要であると考える。

そのための一例として，「ぐんぐん」の活用に加えて，一度に行う問題数を増やしたり，活用型の問題を取り入れたりする必要があると考える。Ｄ校の学力向上の取り組みから，児童の「情報処理能力」や「学習を継続できる体力」を高めることが，次なる学力向上方策の核になると考える。

６　研究のまとめ

今年度は,「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用した,「ボリュームゾーンに対応した学力向上の可能性」について，調査及び考察を行った。

その結果，次の点が明らかになった。

・得点率分布の変化に着目して学力状況を把握することで，効果的な学力向上方策を設定することができる。
・「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」は，成績が「中の下位層」の児童に対して最も効果がある。
・「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の活用により基礎的・基本的事項を定着させることで，活用型の学習を進める素地ができる。
・画面ドリルでの学習や，即時的評価による個人指導へのフィードバックにより，学習において特別な支援を要する児童の学習意欲の向上を図ることができる。

以上より「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」の活用が，学習集団の全体的な底上げ，言い換えれば「できない子をなくす」ために効果が大きいという仮説を立てることができる。

しかし，本年度は調査対象母数が少なく，考察についても推論の域を出ない。

そこで，来年度については調査対象母数を増やし,「できない子をなくすこと」を目標とし,「ぐんぐん」の活用による適切な学習支援の方法と効果について検証していきたい。

具体的には,「得点率分布」の「二山型」「三山型」を「正規分布」に近づけ，さらに，学力低位層の児童を減らすことにより，児童の学力を向上させることができることを実証したい。

一方で，間近に迫る「高等学校の学区再編」を見据え，尼崎市における基礎学力向上も急を要する課題である。新たな学区による高等学校入学試験において競争力を発揮するためには，生徒の学力獲得状況を正確に把握し，学力の二極化を解消することが必須である。

そこで,「ぐんぐんのびる個別ドリルシステム」を活用した中学校における効果についても検証し，小中を一貫した学力向上方策についても考察を進めたいと考える。

参考文献

平成２３年度学力・生活実態調査報告（1912，尼崎市教育委員会）
学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究「全国学力・学習状況調査において比較的良好な結果を示した教育委員会・学校等における教育施策・教育指導等の特徴に関する研究調査」（1911，文部科学省委託研究報告書）

教　育　相　談　研　究

予防的・開発的教育相談

―こころの居場所を考える―

係　　長	井　上　満　夫	
指導主事	青　木　優樹恵	
研 究 員	藤　田　和　久	（清　和　小）
〃	浅　尾　貴代美	（明　城　小）
〃	衣　斐　明　美	（小　園　中）
〃	坂　本　知　弘	（大　成　中）

【内容の要約】

子どもたちのこころの安定にとって，一日の大半を過ごす学校や学級が子どもたちのこころの居場所であることが望ましい。そこで，こころの居場所づくりの取組を通して，子どもたちや学級がどう変容したかを研究する。

まず，子どもたちの実態を把握するために，アンケートを実施する。

その結果をもとに，学級の実態に合わせていくつかの実践を継続して行い，よりよい人間関係づくりに取り組む。その後，学級がどう変わったか，個々のつながりはどう変容したか，学級がこころの居場所となったか等，２回目のアンケート結果を分析し考察する。

キーワード：こころの居場所，絆づくり，構成的グループエンカウンター，
ソーシャルスキルトレーニング，自己開示，自尊感情，自己有用感，
他者受容，振り返りアンケート

1　はじめに ･･ 17
2　研究の内容 ･･ 17
3　実践事例 ･･ 18
（1）実践例１　（小学校３年）･････････････････････････････････ 18
（2）実践例２　（小学校２年）･････････････････････････････････ 22
（3）実践例３　（中学校２年）･････････････････････････････････ 26
（4）実践例４　（中学校２年）･････････････････････････････････ 30
4　研究のまとめ ･･ 34
5　おわりに ･･ 34

１　はじめに

『平成２４年度　学力・生活実態調査報告』(尼崎市教育委員会) によると，学級や学校の雰囲気について「いじめを許さない雰囲気がある」という項目において，学年が上がるにつれて「そう思わない」子どもたちが増えている。

そこで，今年度の研究において，子どもたちが１日の大半を過ごす学級や学校で，いじめを生まない土壌づくりにつながる「こころの居場所づくり」や「絆づくり」に取り組むこととする。「こころの居場所」とは，子どもたち自身が安心感を持つことができる場所であり,自分自身を価値ある存在と認められる自尊感情を感じることができる場所でもある。また,「絆」とは，子どもたち同士がお互いのことを認め合ったり，心のつながりを感じたりできることである。子どもたちが主体的に「絆づくり」を行うことができるように，教師の適切な働きかけについても研究していく。

『予防的・開発的教育相談―こころの居場所を考えるー』をテーマに，学級や学校の中でお互いを認め合える人間関係づくりに焦点を当てて，実践を重ねる中で子どもたち自身や学級がどう変容したかを考察する。

２　研究の内容

研究をすすめるにあたって，まず，子どもたちの実態を把握することが重要である。そこで，実態を客観的に把握するために，それぞれの学級に適したアンケートを作成し，調査を行った。そのアンケートは，昨年度の振り返りアンケートを元に，それぞれの学級に合わせた形で改善を加えた。また，そのアンケートは，子どもたちにとっても，そのときの自分自身や学級の状態を振り返ることができるものとなっている。

特別支援学級の子どもについては，教師が聞き取ることでその子の思いを引き出した。小学校２年の子どもたちには，遊びを主とした人間関係について問い,「友だちといて楽しいときはどんなときですか？」など具体的に記述させる項目も設けた。中学校２年の子どもたちについては，ある学級では昨年度同様の振り返りアンケートを実施し，もう一方の学級ではクラスの実態を客観的にどう見ているかを知るアンケートを実施した。

次に，初回アンケートの結果を受けて，いくつかの実践を継続して行い，よりよい人間関係づくりに取り組んだ。その際，教師は，カウンセリングマインドをもって子どもたちと接することを常に心掛け，日々の実践に臨んだ。具体的には，それぞれの子どもたちの個性を受け入れ，共感的態度で親身になって関わり，子どもたちの喜びや悲しみ，怒りなどの感情を受け止めて，思いやりのある態度で接することに心掛けた。

主な実践としては,「構成的グループエンカウンター（ＳＧＥ)」を小学校，中学校ともに行った。「構成的グループエンカウンター」とは，メンバーの思考，感情，行動にゆさぶりをかける課題であるエクササイズを通して，お互いの自己開示を前提とした人間関係におけるリレーション体験と個の自覚を促す心理的な集中的グループ体験である。また、感情の交流を主とし、自己についての発見や他者の存在や他者との関係を確認し、行動の変容と成長を狙ったものである。

そのほかにも，係活動など日常の活動を工夫して友だち関係を見守りつつ助言し，合唱コンクールなどの行事を通して，自尊感情を高め人間関係を深める取組を実践した。

３　実践事例

（１）　実践例１　（小学校３年）

Ａさん（男子）は，知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害である。Ａさんの特性としては，主に次のようなものが挙げられる。まず，言葉等の遅れがあり，獲得した言葉を使いこなすことが難しい。次に，人と話す時に目が合いにくく，自分の気持ちや思いを他者に伝えることが難しい。また，学校生活や遊び等のルールを理解し，自力で実行することが難しい。さらに，先生や友だちの話を聞く時には集中しにくいなどである。

そこで，今年度は交流学級の仲間との関わりを通して，Ａさんには「みんなと一緒に活動すること」・「助け合い」・「思いやり」をキーワードとして，対人関係の力を育て、集団の中でも活動できる力をつけることを目標に取り組んだ。また，機会を捉えて，担任と交流学級担任が，交流学級の児童にＡさんについての理解が深まるような話をした。担任や交流学級担任は，連絡を密にしてＡさんができる限り交流学級の一員として活動できるようにした。特に交流学級担任は，係や班の活動などにおいても，子どもたちが楽しく，できる限り自分たちで考えて活動できるように学級経営を工夫している。そして，「助け合い」や「思いやり」や「温かくて明るくて楽しい雰囲気」のあるクラスで毎日の学校生活を送ることができるような学級経営をしている。担任はそういった温かい仲間の中にＡさんが自然に溶け込んで活動できるよう，見守る場面と担任として出る場面を分けるようにした。また，担任や交流学級担任はＡさんに対しても交流学級の一員として指導するという方針を一致させた。

１学期の終わりにＡさんのお母さんから，筆談を通してＡさんの本当の気持ちを知ることができたと聞いた。Ａさんは「３年生としてみんなと一緒のことをしたいのだけど，でもできないからお母さんごめんね」という気持ちを抱いていたのだという。Ａさんは３年生としてみんなと過ごしたいという気持ちはあるものの，その気持ちをうまく表現することができない。この話を受けて，２学期から特別支援学級で簡単な文で出来事やその時の気持ちを表現できるように取り組んだ。また，ドッヂボールなどにも楽しく参加できるように特別支援学級で練習をした。そして，交流学級との関わりを通して，Ａさんのこの気持ちがどのように変化していったのかについて見ていくことにした。

実践校では，「合同学級会」という特別支援学級の啓発授業を１学期にもつことにしている。その内容は，特別支援学級担任がＡさんらの障害のことについて話をし，その後各学年の子どもたちが考えたゲームなどをして交流を深めるというものである。また，以前から「合同学級会」にとどまらず，日常においても特別支援学級への関心が高い。本校の温かい雰囲気がその効果をさらに高めていると感じる。このようなＡさんの周囲の環境がＡさんと交流学級の関係に与える影響についても触れたい。

1.　実践の概要

Ａさんは普段，特別支援学級に登校した後，交流学級の読書タイムや朝の会に参加する。その後，交流学級または特別支援学級で授業を受ける。交流の授業としては音楽・図工・体育・総合・学活に参加している。また社会や理科も一部参加している。週３回交流学級で給食を食べ，帰りの会も参加できる時は参加している。交流学級で

は，生活班があり，その班の中の仕事の分担がある。また，クラスの仕事を分担する係もある。日番としての役割もある。Ａさんにもそれらの役割が分担された。それぞれの活動で交流学級担任や担任は，交流学級の児童にＡさんが分かるように説明や手助けをするよう求めた。もちろん子どもたち同士で不足する部分は教師が補った。担任は折に触れ，Ａさんの特性について交流学級の児童に話をし，時にはその関わりを褒めた。

次に挙げるのは，1学期の授業でのＡさんと交流学級の児童の関わりの一例である。音楽の授業でのこと，初めてのリコーダーは，特別支援学級で練習を重ね，シ・ラ・ソの音を出すことができるようになった。音楽の授業の時に『ゆうやけこやけ』の始めの部分を吹くと，クラスが拍手で包まれた。Ａさんは，みんなに拍手されることで「もっと吹きたい」という気持ちになったようで，その後も練習を続けている。次に，町探検や環境体験学習などの校外活動の時のことである。このような活動の時，担任は班からつかず離れず見守ることにしている。Ａさんは「Ａさんこっちやで」と仲間から声をかけられながらみんなと行動を共にした。時々Ａさんが班から離れようとする時は，担任が「みんなと一緒に行きなさい」と言って班に戻るように指導することもあったが，ほとんどの時間は班の仲間がＡさんのことを上手に気遣いながら自分の課題に取り組んだ。また，Ａさんが交流の授業から特別支援学級に戻る時のことである。Ａさんは「行ってきます」とみんなに言い，クラスの誰かから「いってらっしゃい」の声がかかると特別支援学級に戻る。Ａさんは交流学級の仲間とともに，この挨拶の練習を毎日欠かさず続けている。

２学期は前述したように，特別支援学級でＡさんが簡単な言葉や文で体験したことやその時の気持ちを表現できるような取り組みをした。まず，絵本の読み聞かせなどで語彙を増やした。次に，気持ちを表す言葉を集めて，「にこにこ顔」「ぷんぷん顔」「泣き顔」の３つの絵とそれぞれの言葉を結びつけて，模造紙で教室に掲示した。また，休み時間にあったことを「いつ」「どこで」「だれが」「だれと」「どこで」「なにをした」のくくりで聞き取り，最初は教師がそれをもとに作文した。そして，その時の気持ちを，掲示してある「気持ちを表す言葉」の中から選ばせた。出来上がった作文を板書し，連絡帳に写させ，音読させた。さらに，交流学級で人権週間の時に取り組んだ「いま，どんなきもち　すごろく」を特別支援学級でも取り組んだ。他にも「やさしい言葉」や「励ましの言葉」を「フワフワことば」として集め，教室掲示しそれを表現できるよう作文にできる限り取り入れた。また，交流学級でドッヂボールを楽しめるように，特別支援学級でボールの投げ方の練習やボール当てゲームをしてボールが当たらないように逃げることやボールを当てられたら外野に出るなどのルールの学習をした。

２学期の仲間との関わりでは，社会科の授業でスーパーの見学をした時，Ａさんは班の仲間と一緒に話すことを考えて練習し，メモを見ながら，見事お客さんにインタビューをすることができた。また，同じ班の仲間が担任に「Ａさんが１学期の体験学習のことを覚えていてみんなに発表できた」と喜んで報告したこともあった。誕生日には，交流給食の日ではなかったが、給食の招待を受け，みんなから「おめでとう」と言ってもらった。その後，Ａさんの希望を仲間が聞き，Ａさんは昼休みに一緒に鬼

ごっこをして楽しく過ごすことができた。さらに，保健の時間に「健康に過ごすためにはどうしたらいいですか？」の交流学級担任の問いに「はい」と手を挙げて「手洗い、うがいです」とはっきり答えることができ，クラスのみんながそれを聞いて拍手したこともあった。

一方では，Ａさんが仲間の一人として友だちに注意を受けたこともあった。友だちと一緒に休み時間に遊具で遊んでいた時，Ａさんが何人かに向かって「死ね、バーン」と言った。友だちがＡさんに「死ね」と言われてとても嫌な気持ちになったとＡさんにはっきりと言って注意した。Ａさんは友だちに「ごめんなさい」と謝り，担任にも指導を受けた。担任がＡさんに特別支援学級で指導をしている間，交流学級では，日常生活の中で使っていい言葉と使ってはいけない言葉についての話し合いを持った。

言葉を獲得していく際，周りの環境が大きく影響する。「死ね」という言葉は，決して相手に使ってはならない言葉だが，残念ながらテレビ・ゲーム・インターネットなどを通して日常生活で耳にするのが現状であろう。Ａさんは「死ね」という言葉がいけない言葉，怖い言葉，嫌な言葉であることは何となく分かっているものの，それが相手に使っていい言葉かどうかの判断がまだおぼつかない段階であると考える。どこかで「死ね」ということばを耳にし，それをよく考えないままに使ってしまったのである。

友だちから注意を受け，担任から指導を受けた後のＡさんの様子は以下の通りである。（保護者との連絡帳に記載してあるものから一部抜粋）

担任　「少しずつ，言葉が増えて行く段階で，いい言葉とそうではない言葉を学んでいく必要がある段階になってきていると思います。やさしい言葉をたくさん学びたいですね。」

保護者「家庭で本人が「しねはだめ・・・」といっていたので、母が「うん，おともだちに言う言葉じゃないね。ゲームの世界で悪キャラを倒すときに言っている人はいるけど，おともだちに言わないでね。」というと，「しね」のところで耳をふさいでいました。バーチャルの世界とリアル世界，ネットの世界，ただでさえ区別が難しい子どもなのに。」

担任　「『すきがいっぱい』という絵本の読み聞かせをしました。優しい言葉を見つけてねというと，「すき」「だいすき」という言葉を言ってくれました。『すきがいっぱい』の絵本を読んだ後，みんなはＡさんのことが大好きだともう一度伝えました。」

「みんなはＡさんのことが大好き」この言葉を聞いた時のＡさんはすごく安心した表情をしていた。この言葉がＡさんに響いたのは，「交流学級が自分の安心できる場所だ」とＡさんが感じていたからだと考える。

このような交流を通して，Ａさんは自信をつけ，スピーチ発表会では，体育館の舞台で全校児童の前で簡単なスピーチをするまでに成長した。このような成長を遂げたことや，普段自分のその時の気持ちが少しずつ表現できるようになったことは仲間との温かい心の交流があったからだと思う。また，使っていい言葉とそうではない言葉を少しずつ学びながら，理解し表現できるようになってきたことも交流学級との交流を通して培われたものであると考える。

校外学習の様子　　　　　気持ちを表す言葉の掲示　　　　いま，どんなきもち　すごろく

2.　実践の考察

３学期に入り，Ａさんに作文の手法を使って交流学級で活動することについての今の気持ちを聞いてみたところ，Ａさんは「安心」「もう大丈夫」「お母さんにありがとう」という言葉で表現した。担任は，そのことを交流学級担任や交流学級の児童，そしてお母さんに伝えた。交流学級の児童に「みんなが一つになって助け合ったからＡさんがこのような気持ちに変われたのだよ。ありがとう。」と話した。その後Ａさんは「係を一生懸命したい」と言って，仲間と一緒に新しい係にチャレンジしている。

こうした成長を遂げ，Ａさんが「交流学級は自分の安心できる場所だ」と感じたのは，交流学級の仲間がＡさんの特性やいい面とそうでない面，努力していることを理解し，助ける努力をしたと同時にＡさんも交流学級の仲間と一緒に活動するために様々な努力を重ね，お互いが「交流学級の大切な仲間」として，信頼し合って歩み寄った結果であると考える。また，子どもたちがこのように成長したのは，交流学級担任がＡさんを含めた交流学級の児童を心から信じて，毎日のそれぞれの活動を積み重ねているからだと思われる。そして，特別支援学級担任が交流学級の温かくて楽しい学級経営を信頼し，毎日の打ち合わせを密にして実践を積み重ねていったことがこのような成長に結びついたのだと考えられる。このような特別支援学級と交流学級の指導者同士の信頼関係が非常に重要であることも認識できた。

また，本校では，誕生日の人の名前を昼の放送で流し，それを聞くと全員で「おめでとう」を言い，社会見学，自然学校，修学旅行などの行事では全校児童・教職員が見送りやお迎えをするなど，何気ない気持ちを表現する機会を多く設けている。そのことが本校の温かい雰囲気を醸生していると感じる。また，本校には，子どもたち自身で助け合い，上級生が下級生を教えるという伝統がある。このような温かい雰囲気や伝統の中で，本校の児童が安心してそれぞれの活動に取り組め，Ａさんと交流学級が良好な関係を築くことができたと考える。

3.　今後の課題

「ここは自分の場所だ」と安心して感じることができるＡさんと周りとの関係は、現在良好だと思われる。今後もこのような環境が続くように，担任と交流学級担任との日々の連絡を密にすること，指導方針の一致を図ること，信頼関係を深めること，日常のちょっとした気遣いを大事にすること，子どもを信じること，本校の伝統を学び守ること，特別支援教育の啓発をすることに取り組みたい。そして，「みんなと一緒のことをしたい」というＡさんの思いをかなえる為に，少しずつＡさんができることを広げる取り組みをしていきたい。

（２） **実践例２ （小学校２年）**

本学級には，男子２０名，女子１０名の３０名の児童が在籍している。本学級の児童は男女仲がよく，遊ぶときには男女関係なく一緒に遊んでいる。１学期には，２～５人の少人数で遊んでいることが多く，大勢で遊ぶ経験が少ないように感じられた。また，遊びの種類も少なく，休み時間に外で遊ぶ児童のほとんどが鬼ごっこや一輪車で遊び，教室で遊ぶ児童は，折り紙や粘土等で遊んでいる姿がよく見られた。友だちと遊ぶのが楽しいと思うようになってきている児童もいるが，一部の児童は大勢で遊ぶ経験が少なかったり，自分の意見を相手に伝えることがうまくできなかったりするので，もめてしまうことがある。そこで，「仲のよいクラス」「けんかのないクラス」「悪口を言わないクラス」を目指し，クラス全員で遊ぶことやスキルトレーニングを通して，友だちとの関わり方をクラス全体で考えさせることにした。

1. 実践の概要

① 振り返りアンケートの実施

質問内容	7月(%)		11月(%)	
	はい	いいえ	はい	いいえ
友だちとよく遊びますか	７９	２１	９６	４
一人で遊ぶより友だちと遊ぶ方が好き	７９	２１	９３	７
友だちとけんかをしたことがありますか	７９	２１	５２	４８

表１　振り返りアンケート

質問内容は，友人関係に的を絞り行った。この他に，記述式として，「友だちにありがとうと言ったことがありますか」「友だちにありがとうと言われたことがありますか」「友だちと何をしてよく遊びますか」「一人でいて楽しいときはどんなときですか」「友だちといて楽しいときはどんなときですか」「友だちに言われてうれしい言葉は何ですか」「友だちに言われて傷つく言葉は何ですか」「どんなときにけんかをしますか」「学校で困っていることはありますか」「どんなクラスにしたいですか」のアンケートを行った。友だちに言われてうれしい言葉は，ほとんどの児童が，「ありがとう」と答えたのに対し，友だちに言われて傷つく言葉は，あほ，ばか，ぼけ，どっかいけ，変なあだ名など，種類が多いことがわかった。「友だちとどんなときにけんかをしますか」という質問に対しては，遊びの時と答える児童が多かった。友だちと遊ぶ方が楽しいと感じる児童が多い一方で，走るのが嫌だから，一人でゲームをしたいから，一人だと自分のルールで遊べるから，友だちの遊びは難しいから，一人がおもしろいから等の理由で，一人で遊ぶ方が楽しいと感じている児童も２～３人いることがわかった。また，「学校で困っていることはありますか」という質問に対しては，鬼ごっこで鬼が誰かわからない，失敗したときに笑われる，嫌なことを言われるなど友人関係で困っていると感じている児童がいることがわかった。

これらのことから，朝の会や終わりの会，学級活動を通して，大勢で遊ぶ経験やクラスみんなで挑戦する経験をさせ，児童の自己肯定感を高めるとともに友人関係を親密にさせたいと考えた。

② 構成的グループエンカウンター

・ほっとシート

座ると友だちからいいところを見つけてもらえる「ほっとシート」というイスを用意する。ほっとシートには一人ずつ座るように指示し，座りたい児童から順番に座るようにした。また，できるだけ自分の体験したことで友だちのよいところを見つけるよう指示し,他の児童が発表したことと同じいいところを発表してもよいこととした。１時間では全員終わらないので，３～４回に分け,授業中や終わりの会等で実施した。全員終わるのに２ヶ月程かかったが，間延びせず，どの児童も最後まで興味を持って取り組むことができた。「優しい」「走りが速い」「絵が上手」「おもしろい」「元気」「消しゴムを拾ってくれた」等の言葉がよく出ていた。どの児童も何度もほっとシートに座りたがり，ほっとシートに座った児童は，うれしそうな顔をして友だちが発表してくれる自分のいいところを聞いていた。

・ごめんなさいコーナー

授業で「ごめんなさい」の学習を行った。内容は,「Ｂくんが友だちと話をしていて，絵を描いているＣくんにぶつかってしまった。しかし，ぶつかったＢくんが先に謝ったのでＣくんは怒らずに許してあげた」という話である。そこで，Ｂくんが先に謝ったことは伏せ，なぜＣくんが怒らなかったのかを考えさせた。児童の意見の中から，Ｂくんが先に謝ったという意見は最後まで出なかった。これは，児童のほとんどが，ぶつかられたらすぐに怒るというのが条件反射となっており，わからなかったようである。この授業を行った後，終わりの会に「ごめんなさいコーナー」を設けた。ごめんなさいコーナーでは,「友だちにごめんなさいと言われたこと」「友だちにごめんなさいと言えなかったけれど，言っておけばよかったこと」を発表させた。ごめんなさいコーナーで自分のごめんなさいを発表してもらった児童は，うれしそうに友だちの話を聞いていた。誰も発表がなかった時には，担任が見ていたごめんなさいの場面を話した。担任の話を聞いて，友だちに言われたごめんなさいを思い出す児童もいた。授業で先に謝ることを学習しているので，友だちにぶつかった時等，すぐに謝れる児童が増えた。

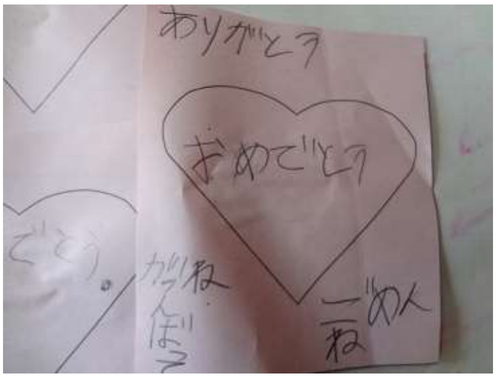
・クラス全体で同じ遊びをする

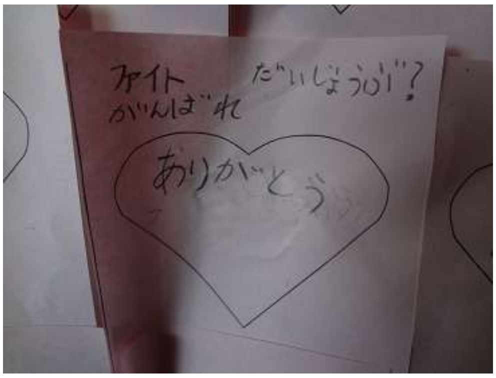
クラス全体でリレーと鬼ごっこ，大縄跳びを実施した。リレーでは，クラスを４チームに分け，決勝戦まで行った。鬼ごっこでは，３分ごとに鬼(５～６人)を交代し，毎回，全員が鬼を経験するようにした。全員で遊んだり，全員が鬼を経験したりすることを担任側が設定することで，大勢で遊べるようになり，鬼を嫌がらずにできる児童が増えた。大縄跳びでは，上手に跳べている児童の跳び方を褒めることで友だちの真似をする児童が増えた。

・おいしい言葉集め

友だちに言われてうれしいことばを「おいしいことば」といい，おいしいことばを考えさせた。「ありがとう」「ごめんなさい」「だいじょうぶ？」「がんばれ」などがよく出ていた。考えさせた後，ハート型の紙においしい言葉を記入させ，黒板に貼らせた。自分が考えた言葉と同じ言葉を見つけたり,「それは，思いつかなかったなぁ。」と友だちの考えに驚いたりしていた。

資料１　「おいしいことば」





2.　実践の考察

①　振り返りアンケート

振り返りアンケートを行ったことで，クラスの実態を把握するのに役立てることができた。また，記述式で答える質問を入れることで，友だちとよく遊んでいる遊びは何か，なぜ一人で遊ぶ方が楽しいと思っているのか等，アンケートに答えた時の気持ちがよくわかってよかった。また，大勢と遊ぶ経験を増やす等のこれからの目標の見通しを持つことができた。

②　構成的グループエンカウンター

・ほっとシート

ほっとシートに座り，友だちから自分のいいところを話してもらうことで自尊感情を高めることができた。マイナスイメージの言葉が出てこないか心配していたが，マイナスイメージの言葉を言う児童はいなかった。いいところをたくさん言ってもらえる児童もいれば，そうでない児童もいた。あまり言ってもらえなかった児童の中には，ほっとシートをしてから友だちに優しくなり，自分からすすんで友だちに声をかけるようになった児童もいた。担任が思っていなかった児童がおもしろいと言われていることもあり，子ども同士の方が担任よりお互いのことをよく知っていると感じた。ほっとシートを児童用のイスで行ったので，イスに飾りを付けたり，バスタオルをかけたりすることでより特別なイスとして扱うことができ，ほっとシートの特別感をさらに引き出せたと思う。また，友だちのいいところを見つけさせ，カードに書いて友だちに渡したり，懇談会の時に保護者に書いてもらい，自分の子どもに渡したりするなど応用もできると考える。

・ごめんなさいコーナー

ごめんなさいコーナーを設けたことで，友だちとぶつかったり，物を落としたりしたときに自分から「ごめんなさい」を言える児童が増え，トラブルを減らすことができた。ごめんなさいコーナーで，最初は他学年の児童から言われた「ごめんなさい」を発表していた児童が，友だちの発表を聞き，自分のクラスの児童の「ごめんなさい」を発表するようになった。クラスの児童への興味・関心が増えたのではないかと考える。アンケート結果にも顕著に表れており，「友だちとけんかをしたことがありますか」という質問に対し，約半数が「いいえ」と答えた。けんかをしていないはずはないが，謝ってもらえることでけんかの結果に納得でき，けんかしたことが後に残らない児童

が増えたのではないかと考える。けんかをすることは決して悪いことではない。子どもたちはけんかを通して社会性を学んでいくのである。けんかをした後の結果に納得がいくということが大事であると感じた。

・クラス全体で同じ遊びをする

一人遊びをよくしていた児童が，クラスの児童と遊ぶ経験が増えたことですすんで友だちの輪に入ろうとするようになった。本学級には，不登校気味で毎日午前中のみクラスで学習するＤさん（男子）がいる。クラス全体で同じ遊びをするようになってから，周りの児童がＤさんに声をかける場面をよく見かけるようになった。固定されていた人間関係に広がりが見られ，ドッジボールやドッジ鬼，バスケットボール，鉄棒など遊びの種類も増え，Ｄさんも新しい輪の中に入りやすかったと考える。

・おいしい言葉集め

この授業の前に，ふわふわ言葉とチクチク言葉を行ったところ，ふわふわ言葉よりもチクチク言葉の種類の方が多かった。そこで，ふわふわ言葉を増やすために，おいしい言葉集めを行った。授業後は,「ありがとう」や「大丈夫」など優しい言葉かけが増えた。マイナスイメージの言葉よりもプラスイメージの言葉を使うことで，自然ともめ事も減ってきたように思う。教師側もプラスイメージの言葉かけを心がけたい。

3.　今後の課題

クラス全員で遊ぶことやスキルトレーニングを通して，友だちとの関わり方をクラス全体で考えさせたいという思いを持ち，構成的グループエンカウンター等に取り組んだ。本学級の児童は, 些細なことで友だちとけんかをしたり, もめたりしてしまう。けんかが起きた時には，双方の意見をしっかり聞き，お互いに納得のいく話し合いが必要であると感じた。また，クラス全員で遊ぶ経験が増え，自然と友だちの輪が広がり，絆ができたことで，友だちを思う気持ちが芽生えてきたように感じている。自己肯定感を高めたり，友人関係の親密性を高めたりするのに構成的グループエンカウンターは有効であると考える。また，構成的グループエンカウンターを通して,「ごめんなさい」や「ありがとう」などの言葉かけが重要であると感じる児童が増えた。しかし，授業の中で言葉かけが重要であると感じることができても，それを継続することは難しい。そこで，終わりの会でコーナーを作って発表させたり，授業や休み時間等を利用して振り返らせたりして，学んだことを風化させない工夫が必要である。

構成的グループエンカウンターを通して感じたことは，いいところを見つけ合うことや間違ったときにはすぐに謝ることが，児童だけでなく教師対児童間にも有効だということである。児童に指導するだけでなく，教師自らが実行する姿勢を見せたい。本学級の児童は，間違ってもよいクラスを目指している。間違ってもよいクラスにするためには，教師側が余裕を持ち，教師が間違えた時にはすぐに謝り，児童の間違いにおおらかな気持ちで接していくことが大事だと考える。また，教師がプラスのイメージで話をしたり，注意をしたりすることで児童は素直に聞きやすくなるように思われる。例えば,「廊下を走らない」と言うのではなく,「廊下は歩こうね」と言い,「それは，やっては駄目」と言うのではなく,「止められるかな？」と聞くなど，プラスのイメージの言葉がけを心がけたい。今後も, 児童とともに学習し, 成長できるように, 構成的グループエンカウンターを授業に取り入れたいと考える。

（３） 実践例３ （中学校２年）

本学級は，男子１８人，女子１８人の計３６人である。当初から，全体として明朗快活で人懐っこい生徒が多く，中には自己表現の苦手な生徒もいるが，男女が強く意識することもなく，比較的自由な雰囲気で発言し合うことができる集団である。

授業中も一生懸命に取り組み，とくに答えがはっきりしている教科の問いには自信をもって挙手する。少しでも自分を伸ばそうとする表れだと考える。基礎学力の差が大きいと思われるが，座席の近くの生徒同士で教え合うなど，学び合いの雰囲気もある。生活面では，日番や清掃などの係活動の中でお互いに声をかけ助け合うことができる。自分の仕事に対しては責任をもって頑張れる生徒が多い。

しかし，まだまだ子どもっぽく，自分を抑えることが出来ず自分本意な発言や，羽目を外したり人を中傷したりする場面があり，わがままな言動や身勝手な行動が見られることもある。公的な場面で発言が出来ず，私的な悪口や陰口という形で表れ，そうした陰口で傷つき外見的に明るくしている生徒も実は心の中にストレスを抱えていると思われる。

学級開きで，『楽しくて居心地の良いクラス』にしたいと語った。「行事があればみんながひとつになって取り組み楽しめること。そして，人にはいろんなタイプの人がいるけれど，一人一人の個性を理解し認め合うこと。そして，学校生活の中で，みんなが『教室に入るとホッとする』ようなクラスが理想で，そんなクラスにするためにみんなの協力が必要です。」と伝えた。

すべての生徒にとって『楽しくて居心地の良いクラス』になるために，以下の実践を行い，クラスそして生徒たちの様子がどう変わったかを考察する。

1. 実践の概要

クラスの実態を客観的に把握するため，１学期終業式後の学活で『クラスに関するアンケート』(図１)を実施した。

「このクラスにいると楽しい」とても思う１７人，少し思う１３人・・・８５％

「このクラスは居心地がいい」とても思う１２人，少し思う１６人・・・８０％

このように，目指している『楽しくて居心地の良いクラス』に関しては，「思う」と答えている生徒が８割を超えていた。これは近年の本校の落ち着いた雰囲気や学習環境が整っていることも理由の一つだと考えられる。

「このクラスでは，お互いのことをよく知っている。」とても思う３人，少し思う１４人・・・５０％，あまり思わない１４人，ぜんぜん思わない４人・・・５０％

楽しくて居心地の良いクラスと多数の生徒が思っている反面，お互いのことをよく知っていると思っていない生徒が半数いるという実態もつかむことができた。

「このクラスでは，友だちが間違うと笑ってしまう雰囲気がある。」とても思う７人，少し思う２２人・・・８２％　自由な雰囲気で発言し合うことができ本音を表現できる生徒が多く，笑い声もよく聞こえてくるクラスである。しかし，たとえ冗談であっても友達を嘲笑するような笑いによって傷つき，心の中にストレスを抱えている生徒がいると思われる。『教室での笑い』の質でクラスは決まると言っても過言ではないと思っている。

アンケートで表れた問題点について，２学期の道徳や学活，各行事，日々の生活の

中で取り組み，すべての生徒にとって『楽しくて居心地の良いクラス』となるよう，生徒とつながるためのコミュニケーション，生徒同士がつながる絆づくりを行いたい。

さらに，構成的グループエンカウンターを通して，信頼関係を深めるため，本音を表現し合いそれを認め合えるような体験や，自分や他者への気づきを深め，人とともに生きる喜びや，わが道を力強く歩む勇気を育みたい。

① 学活での構成的グループエンカウンターの取り組み

『二者択一』９月実施

昨年度の実践にあったもので，相反する２つの言葉から自分が好きなもの，より大切だなと思うものを選び，選んだ理由を書き込む。その後，グループごとにどちらを選んだか，その理由とともに発表する。その際，話を聞くものは口を挟まず頷くのみとした。

初めての構成的グループエンカウンターの体験だったが，終始ワイワイと楽しそうに取り組むことができていた。ねらいとする，自己主張，他者受容が達成できたのではないかと考える。

(生徒の感想)・すごいおもしろくて心がスッキリした。・しゃべったことはあっても，何が好きで何が苦手なのか知らなかったけど，知ることができて「へぇー」って思った。・みんなの理由をいろいろ聞けて，その意見いいなぁーおもしろいなぁーって思った。こうやってみんなで意見を言っていくのは楽しいなーと思った。・すごいもりあがって楽しめてよかった。・言いたいことが簡単に言えるなんて，とてもいいことだなと思いました。・発表が恥ずかしかった。

『Happy Letter』１２月実施

クラスのみんなに，日ごろの感謝の気持ちや良いところを手紙という形で伝え合う。

大きな行事や定期テストが終了した学期の締めくくりの時期に行ったためか，さまざまな長所や，多くの感謝の言葉が書かれていた。積極的に取り組む生徒が多く，クラスの全員宛に書いた生徒も何人もいた。ねらいとする，自己理解，他者理解が達成できたのではないかと考える。

(生徒の感想)・「ありがとう」と言うのは苦手で，今回初めて手紙で「ありがとう」と書いてみて，照れくさかったけど良かったと思った。・自分はクラスの中に感謝している人がたくさんいたんだと思った。・手紙をもらって，自分のことをこんな風に思っているんだとわかり，心が少し温まったような気がしました。・いろんな人から手紙にいっぱいの「ありがとう」があってうれしかったです。・感謝の言葉が多くてよかった。また，みんなの役に立つことをしていきたいと思いました。

② 合唱コンクールの取り組み

２学期最大の行事，合唱コンクールに向け，意識を高め盛り上げることでクラスの絆を深めたい。

前もって『中２の合唱コン』について考える機会を持ち，終わった時にこんな合唱コンクールだったらいいなと思うことや，練習中はどんな自分でいたいかを考えさせた。練習期間の初日には『それぞれの役割』を紹介した。指揮者・伴奏者・パートリーダー・スピーチ・歌詞を大きく書いてくれた文化委員と順に一言ずつ気持ちを話してもらい，「よろしく」「みんなでがんばろう」と拍手でエールを送り合った。最後に

歌声はクラスのみんなであることを伝え，それぞれに役割があり，一人一人の声がかけがえのない大切な存在で，みんなで支えあい高め合っていこうと約束し練習を開始した。練習期間は２週間あったが，一回集中して本気で歌う方が効果的だと，毎回短時間ハイテンションの雰囲気で，もめ事などのない，いい練習をすることができた。

当日には，担任と指揮者が考えた一言を書いた画用紙を，歌う前に指揮者が舞台上で見せた。一瞬にして舞台に立った全員が１つにまとまることができ，聞く人の心を打つ合唱となった。このサプライズは，印象に残った生徒が多く，後の作文にも書いている生徒が多く見られた。結果は奇跡の優秀賞。わずか２週間だったが，合唱への取り組みでクラス全員が大切にしたい思い出が出来，絆を深めることができた。

（生徒の感想）・合唱コンの日すごい緊張しました。歌う前の指揮者からのサプライズは笑うことができたので力を抜いて歌うことができました。感謝したいです。２組の合唱は今までで一番良かったと思います。あの時の合唱は楽しかったです。私は上手に歌えないし，声も大きくないけれど少しは２組のみんなの役に立てたと思います。練習に付き合ってくれた先生を喜ばせることができてよかったです。・２組は他のクラスより練習時間は少なかったです。なぜ優勝することができたのかなと疑問でした。２組はもともとそういう能力を持っていたのかもしれない。例えば，練習でも一日の最後に歌う時はその日一番の大きな声を出します。こういう事が準優勝というれしい結果につながったんだなと思いました。ぼくはこんな面白くて最高のクラスの人たちといっしょに歌えて楽しかったです。

③　教育相談週間

本校では教育相談を年間計画に位置づけ，学期ごとに実施している。生徒指導提要にあるように，日ごろから一人一人に感心をもち生徒理解を心がけ，「よいところを発見する」という姿勢で関わっている。もちろん普段から気軽に声をかけコミュニケーションを図るようにしているが，時間をとって面接する場面で，よくがんばっている点や成長が見られた点などのプラスの情報を教え，心に深く響かせたいと考えている。そして丁寧に生徒の話に耳を傾け，気持ちを推し量りながら聞くように心がけ，信頼関係の構築に努めている。

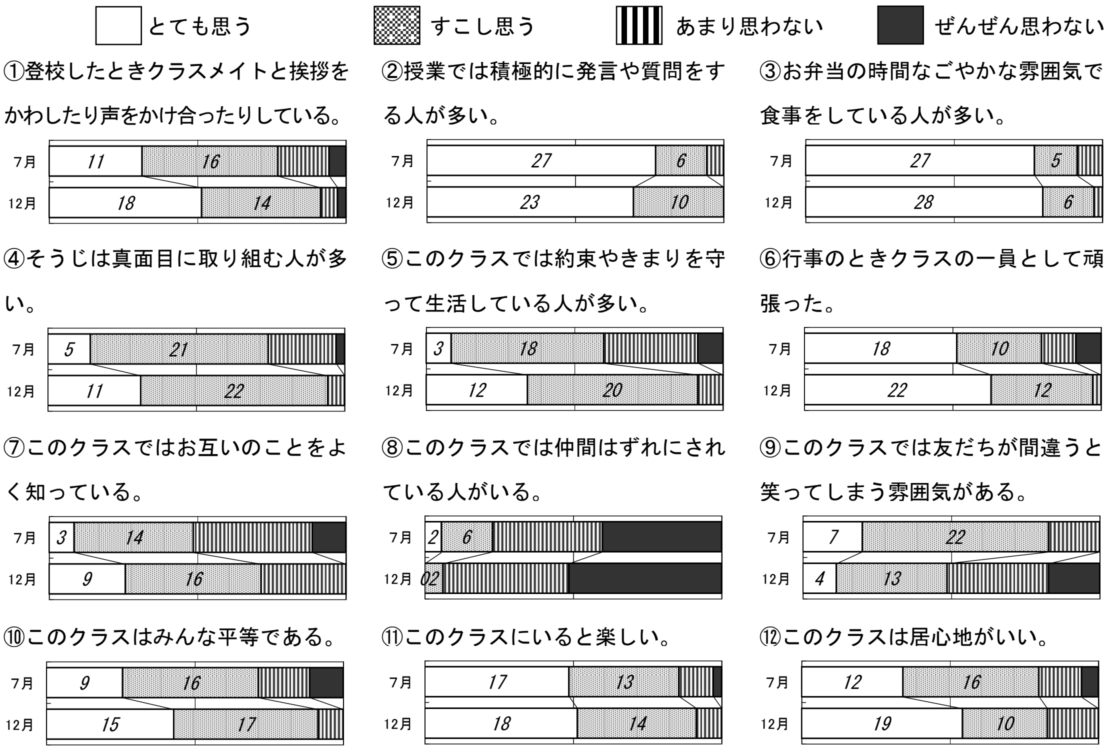
④　学級通信

クラスのみんなのことを良く知り，認める機会を多く持たせる内容になるように意識し発行している。例えば，教育相談で全員に共通の「幸せだなと感じるときは？」と質問し，その回答を集計して紹介したり，「夏休みの思い出」など個々に聞いた情報や，各行事後の作文など，生徒の思いや前向きな意見を必ず載せたりしている。日誌に書いている些細な出来事，仲間同士のつながりややりとり等を取り上げて掲載してクラス全体のものにしていくことで，お互いに対する理解やクラスに対する考えが深まると考える。さらに，皆勤賞や定期テストに向けた学習時間などジャンルを広げ，多くの生徒を紹介するようにしている。

生徒は配布された学級通信はすぐに目を通すので，紙面に自分が登場するのを楽しみにしているも生徒も多いし，自分とは違ういろいろな感想や意見，感じ方をより実感できていると思う。学級全体の成長や，ある子の良さを紹介する度に，意欲的な学校生活を送るようになっている生徒も増えていると感じられる。

2．実践の考察

図１　『クラスに関するアンケート』集計比較グラフ



学期末に実施した『クラスに関するアンケート』の結果である(図１)。アンケートによって，普段の声かけや個別の面接ではつかめない実態をつかむことができた。

１学期と２学期の結果を比べると，２学期の結果がすべての項目において良い方向に変化している。１学期に表れた問題点「⑦このクラスでは，お互いのことをよく知っている。」に「思う」と答えた生徒が５０％弱から７１％へ上昇し，「⑨このクラスでは，友だちが間違うと笑ってしまう雰囲気がある。」についても「思う」と答えた生徒が８２％強から４８％と減少している。

この結果は，学活での構成的グループエンカウンターの取組によって，自分や他者への気づきを深め信頼関係を築くことで，一人一人が思いやりの気持ちを持つようになったことや，合唱コンクールでの取組で生徒同士が強い絆で結ばれ，クラスが１つになっていったからだと考える。クラスとしての成長が顕著に表れており，１年間の実践の成果といえるだろう。

3．今後の課題

すべての生徒にとって『楽しくて居心地の良いクラス』となるように，そして問題点を克服するため実践を行った。クラスの雰囲気は生徒一人一人が作るもので人間関係が大きく左右するため，心のケアや絆づくりの大切さを再確認できた。今後も引き続き，「このクラスは居心地がいい」と１００％の生徒が思えることを目指し，年度末まで実践を続けていくことが課題だと考える。

さらに，今回はクラス内に留まったが，学年全体で構成的グループエンカウンター等の取組を実践できたら，新年度の新しいクラス内での人間関係づくりに大きな成果をもたらすのではないかと感じている。

（４） 実践例４（中学校２年）

本学級は，男子１６名，女子１８名で計３４名が在籍している。クラスの様子は，男子は，運動部に所属している生徒がほとんどで活発である。女子は，落ち着きがあり，女子特有のグループを強く意識する生徒が少なく，クラス全体としては男女関係なく仲が良い。

学級開きでは，担任が考えるよいクラスの条件を提示し，その上で，生徒たちに1年間のクラス目標を話し合わせた。ここで決まった学級目標に向かって努力し，試行錯誤させる中で，個人やクラスとしての成長をはかっていくことを重視した。

１学期に行われた体育大会では抜群の団結力を発揮し，学年競技・総合得点・学級旗コンテストの全てに優勝し，クラスの友情も深まった。

しかし，その中にＥさん(男子)という気になる生徒がいる。Ｅさんは，コミュニケーションの取り方が上手ではなく，クラスで気軽に話しかけることができる仲間が少ない。また，１年生の時から継続して，仲の悪いクラスメイトとその仲間から，悪口や嫌がらせを受けていた。２年生になっても，部活動でいじめられていることが発覚した。また,クラスの生徒Ｆさん(男子)とＧさん(男子)からも嫌がらせを受けていた。

1. 実践の概要

１学期の終わりごろに行ったふり返りアンケート(図１)の結果，クラスが全体的に仲が良くても，コミュニケーションの取り方が上手でない生徒が疎外感を感じていることが読み取れた。また，Ｅさんへのいじめや嫌がらせがあったことから，自己主張や他者理解の技能を高める構成的グループエンカウンターの授業を取り入れた。さらに，合唱コンクールといった行事によって，友人関係をより深め，自尊感情を高めていく計画を立てた。

① 第1回構成的グループエンカウンター「サイコロトーキング」「どっちを選ぶ？」

授業のはじめに導入として「サイコロトーキング」というエクササイズを取り入れた。このエクササイズは，まずサイコロの１～６のお題を決める。次に６人グループとなる。そして，順番にサイコロを振り，サイコロが出た目のお題について発表し，グループ内のメンバーからの質問に答えるというものである。このエクササイズで聞き手は，しっかり目を見て，反論せずにうなずくという態度で聴かせた。このことにより，楽しみながら自分の意見を主張することと友だちの意見を受け入れる姿勢を身につけさせた。

「どっちを選ぶ？」は，まず個人で２つの言葉から，より大切だなと思う方を選び，その後，４人グループに分かれてそれぞれが自分の意見を出し合った。例えば，生まれ変わるなら男か女どちらを選ぶかなどの判断に迷う１０個の質問項目を準備した。このエクササイズも，討論や反論をするのではなく,「サイコロトーキング」の時と同じ傾聴の態度で行わせ，自己主張・他者理解からの他者受容を目的として行った。

各グループとも４人という話しやすい人数であったこともあり，口下手なＥさんやおとなしい女子も，とても楽しそうに自分の考えを積極的に伝えていて，笑顔のたえない1時間となった。クラス全員が「今日の話し合いは楽しかった。またやりたい」というような感想を書いていた。

（生徒の感想）

・「どっちを選ぶ？」では，自分の意見を主張することができました。みんなの意見も楽しく聞けたし，みんな私が話しているときにしっかり聞いてくれていたので，発表している自分の気持ちが良くなりました。また，こうやってみんなと話し合いがしたいです。

② 第２回構成的グループエンカウンター「いじめ」

内容は，１０項目を自分自身の主観で，いじめと思うかどうかの基準を決め，４人班で話し合いながら結論を出していくというエクササイズである。自己主張・他者理解しながら，自分の今までの言動を振り返り，人によってそれぞれいじめと感じる度合いが違うことを知ることをねらいとした。そのことにより，自分はいじめているつもりではなくても相手はいじめと感じていることがあることを理解させ，いじめの再発防止を目的とした。生徒たちは，真剣にそれぞれの意見を主張し，討論しながら，うまくまとめていた。

（生徒の感想）

・自分がいじめと思っていても，他の人とかは全然違っていたり，いろんな意見があって，おもしろかった。自分は相手が嫌がっていることをしたらいじめやと思う。だからこれからは相手の気持ちを考えて，行動しようと思う。

③ 「合唱コンクール」

学級目標の一つである，「共に行事で全勝しよう」という目標達成のために最優秀賞をねらって全力で取り組ませた。同じ目標に向かい努力する中で，思いやりや助け合いの心を育むこと，人間関係の形成やクラスのために頑張っている生徒を認め評価することによる他者理解の育成に努めた。

合唱曲が決まってすぐに合唱曲のＣＤを準備し，生徒たちの中から自発的にクラス全員分の練習用のＣＤをコピーしてくれる生徒を募った。

１週間という合唱コンクールの練習期間では，まず初日に，今回の合唱コンクールに対する担任の思いを話し，熱心に取り組むことへの意義を説いた。そして，クラスの委員長と副委員長にも意気込みをクラス全体に伝えさせ，団結する姿勢を築いた。

次に，昨年度最優秀賞を獲ったクラスの合唱を聴き，生徒たちに目指すべき姿の共通のイメージを持たせ，合唱練習に臨ませた。その際に毎回の行事で行っている「ありがとうカード」を今回もたくさん書いてもらうことを伝え，練習の取組から仲間の頑張っている姿を探し，見つけ，評価することの姿勢を養わせた。

また，毎日の終礼の際に，合唱コンクール練習計画表を書かせ，自分たちの練習内容や充実度，合唱練習の感想を書かせ，毎時間の練習で課題を達成していく喜びややりがいを感じさせながら取り組ませていった。

合唱コンクールが近づくごとに，クラス合唱の完成度も高まっていき，毎日の練習計画表の充実度も１００％とする生徒がほとんどになった。男女ともにどのクラスよりもまとまった練習をすることができていた。クラスの生徒のほとんどがどのクラスよりも多くの時間を費やし，真剣に取り組んできたことを自負し，最優秀賞をとれる自信を持っていた。しかし，本番前日の練習で事件が起こった。ＥさんとＦさんがトラブルを引き起こした。この指導により，今までの和やかに取り組んできた合唱の雰囲気は一転し，重苦しいものとなった。

本番では，前日の重苦しい雰囲気をどうしても引きずってしまい，声量が思った以上に足りず，結果は目標の最優秀賞や優秀賞はとれずに終わった。

結果発表の際に，予想外の結果に泣き崩れる多くの生徒がいた。教室に戻った後に今回の合唱コンクールのクラスの生徒たちの取組を担任から讃えた。そして，感想文と「ありがとうカード」を書かせた。

「ありがとうカード」を一人４枚は書くというノルマを設けたが，多くの生徒はそれ以上書きたいということで，一人１０枚くらい書いていた。また，４・５人の生徒はクラス全員分の「ありがとうカード」を書いてくれていた。この取組により，他者受容・他者理解の姿勢が身についたことが読み取れた。また，次の行事へのやりがいを見つけることになっていると考える。驚くことに，Ｆさんもクラスの生徒全員に向けて「ありがとうカード」を書いていた。Ｅさんに対しては，一番早くに朝練に来て合唱計画表を配ってくれていたことや大きい声で歌ってくれていたということに対して評価をしていた。

（生徒の感想）

・声が大きく出せるようになり，よかったです。合唱は一年の時にもしましたが，こんなに練習していませんでした。ここまで真剣になれたのは初めてでした。1 位はとれなかったけど全力を出せたのでよかったです。（Ｅさん）

④　第 3 回構成的グループエンカウンター「２学期を漢字 1 文字で表すと・・・」

内容は，話し合いの中で，個人ではなくクラス全体として２学期を振り返るというものである。まず，それぞれが２学期を振り返り，このクラスの２学期を漢字一文字で表すと，どのような漢字に表すとよいかを考える。その後，４人グループとなり，それぞれのグループで自分が考えた漢字とその意味を説明し合った。全員の説明が終わったあと，グループ全員の意見が盛り込まれているような合体漢字を各グループごとに話し合いながら作成する。最後にそれぞれのグループの代表者が合体漢字の意味を全体に説明するというものである。このエクササイズは，自己主張・他者受容・他者理解の技能を高めながら学期の振り返りを行う目的で取り入れた。各グループとも，それぞれの意見を積極的に出し合い，相手の意見を尊重しながら独創的な合体漢字を考えていた。

（生徒の感想）

・班の人のことがいろいろ知れてよかった。班でそれぞれの意見があり，６組のことをいろんな感じ方をしているんだなぁと思った。３学期は球技大会で「共に全勝」を目指したいです。

⑤　個人ノート

毎週末に，個人ノートをクラス全員に書かせている。内容は，次の行事に対する意気込みであったり，クラスの頑張ってくれている生徒を評価したりと，テーマを毎回決めて書かせている。そして，そのテーマ以外に担任に伝えたいことや悩み相談を書き込めるようにしている。このように，生徒と担任の交換日記のようなものをすることで，口頭での自己開示が苦手な生徒も自分の思いを表現できるような取組を継続して行った。

2.　実践の考察

図１　振り返りアンケート　　　　　（１学期　１名欠席，２学期　２名欠席）

① この学級の人とは，とても仲良くしている	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	20	11	2	0	0
2学期	17	11	3	1	0

② 学校に来ると楽しいことがある	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	18	11	2	2	0
2学期	19	10	2	1	0

③ 自分を頼りにしてくれる友人がいる	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	8	18	5	1	1
2学期	12	16	2	2	0

④ 困っている友だちがいれば助ける	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	14	17	2	0	0
2学期	19	10	3	0	0

⑤ 自分は，この学級の人（友だち）から好かれていると思う	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	3	15	12	2	1
2学期	2	19	8	3	0

⑥ 自分のことが好きである	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	2	7	20	3	1
2学期	3	13	9	7	0

⑦ 自分の悩みを相談できる友人・先生がいる	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	17	13	2	1	0
2学期	15	12	3	2	0

⑧ 学級目標を達成する意欲がある	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	12	16	4	1	0
2学期	16	13	2	1	0

⑨ 係活動や委員会活動には積極的に取り組んでいる	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	16	13	2	2	0
2学期	13	15	3	1	0

⑩ 学校や学級のきまりや約束を守ることができている	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	11	18	2	2	0
2学期	16	14	1	1	0

⑪ 学校行事や学年行事のとき，自分は学級の一員として頑張った	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	18	10	3	2	0
2学期	11	18	1	2	0

⑫ やればできるということを実感できた	とても当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
1学期	15	13	3	2	0
2学期	12	15	3	2	0

１学期の終わりと２学期の終わりに行ったアンケート結果である（図１）。

１学期と比べほとんどの項目で大きな変化は見られなかったが，全体的に高い水準を保つことができていると考える。この背景には，個人ノートや「ありがとうカード」などの実践を行い,他者受容･他者理解を促す取組を継続的に行った成果だと考える。Ｅさんの選んだ項目で大きな変化があったのが，②の「学校に来ると楽しいことがある」である。１学期は「全くあてはまらない」を選んでいたが，２学期になると,「ややあてはまる」を選んでいた。この背景には，構成的グループエンカウンターの授業で，コミュニケーションの取り方が苦手ながらも自己開示を行ったことにより，クラスでの人間関係づくりに成功したことも一つの要因だと考える。また，行事で友情が深まり，その後の人間関係の構築につながったことも考えられる。⑦の「自分の悩みを相談できる友人・先生がいる」の項目では１・２学期ともに「とてもあてはまる」にしていることから，悩みを相談しやすい体制がつくれていることがわかる。このことが，この度のいじめの早期発見・早期解決につながったと考える。この背景には，普段の声かけとは別に，個人ノート等でのつながりの成果があったと考える。

3.　今後の課題

アンケートの結果より，１・２学期ともに⑥「自分のことが好きである」の項目の数値が低いことが目立つ。今後は，来年度に向けて，自尊感情を高めるためにはどんな活動が効果的かを追求したい。「ありがとうカード」や学級通信でお互いのがんばりや長所などを評価することは継続しながら，その結果を自分で振り返らせ，他者理解だけでなく自己理解につなげていくことも有効だったであろう。また，アンケートで「全く当てはまらない」の項目に複数個チェックしている生徒がいる。現状では問題行動としてあらわれていないが，この生徒の抱える思いを聞き出し，生徒理解に努めていきたい。今後も，人間関係が希薄で，コミュニケーション能力の低い生徒に向けた構成的グループエンカウンター等の実践を継続していき，人間関係をさらに深めていく活動を考えていきたい。そして，学校を全ての生徒にとって楽しく学べる場としていきたい。

４　研究のまとめ

本年度は，学級や学校において，いじめを生まない土壌づくりにつながる「こころの居場所づくり」と「絆づくり」に取り組み，子どもたちや学級がどう変容したかを研究した。また，変容を客観的に捉え，実践前と実践後の比較がしやすいように，学級の実態に応じたアンケートを作成し，実施した。そして，初回アンケートの結果をふまえ，個や学級の実態に合わせた実践を行った。

その結果，構成的グループエンカウンターを継続して行うことで活動自体を楽しむことができ，グループで話し合う機会を多く取り入れることで個々の交流を深めることができた。また，実践した結果を学級通信などで発信することによって，友だちが自分のことを認めてくれていることを実感し，友人関係が深まった。

例えば，ある子どもは，友だちからがんばっていると認められ，自信を持ち，学級を安心できる場所と感じることができた。また，ある子どもは，「ありがとう」や「大丈夫」など優しい言葉かけが増え，友だちを思いやるようになった。つまり，この１年間の取組によって，子どもたちは「こころの居場所」を学級の中に見つけられたと考える。

また，教師がカウンセリングマインドをもって子どもたちと向き合うことで，「先生が自分のことを認めてくれている」と子どもたち自身が感じ，子どもたちから教師に心を開くようになり，教師と子どもの関係が深まった。今後も，学級に働きかけ，個別の関わりを多くして，子どもたち自身が「自分は必要とされている」と実感できるように継続して人間関係づくりに取り組むと同時に，この取組を学年や学校全体に広げていきたい。

５　おわりに

『平成２５年度　全国学力・学習状況調査』において，「自分にはよいところがあると思う」という自尊感情や，「人が困っているときはすすんで助ける」などの思いやり等を行動に移す力が十分と言えない結果が出ている。そこで，ますます，授業をはじめ学校生活のあらゆる場面において，他者と関わる機会を工夫し，それぞれの違いを認め合う仲間づくりが大切である。そのために，年間を見通した予防的・開発的な取組を計画・実施することが必要である。私たち教職員の役割は，学校で子どもたちが集団や人間関係に適応できるように支援するだけではなく，子どもたちの将来を見据えて，社会の中で主体的に関わっていくことができる人間の育成を支援していくことであると考える。今後も，教育相談の立場から，人間関係を築く力をつけさせるために有効な手立てについて研究を深めていきたい。

【参考文献】

『生徒指導提要』文部科学省　２０１０年
『エンカウンターで不登校対応が変わる』片野智治，住本克彦，川端久詩，山下みどり　編
図書文化社　２０１０年
『エンカウンターで学級が変わる』國分康孝　監修　図書文化社　２００７年
『いじめ対応マニュアル』兵庫県教育委員会　２０１２年度
『感情ポスター　いま，どんなきもち？』大阪府人権擁護委員会ＨＰ
『特別支援教育ソーシャルスキル実践集』岡田智　編著　明治図書　２０１０年
『平成２５年度　全国学力・学習状況調査』文部科学省

教育の情報化研究

校務の情報化推進についての研究

－校務の情報化に関する研修モデルの開発と検証－

指導主事	民　谷　洋　二
〃	大　森　康　充
研 究 員	有　馬　陽　一（水 堂 小）
〃	兒　玉　　崇　（園 田 小）
〃	大　西　勝　也（中 央 中）
〃	木　下　　瞳　（大 成 中）
〃	早　川　洋　平（小 園 中）

【内容の要約】

昨年度より，小・中・特別支援学校において統一された校務支援システムが導入されたことで，本市の「校務の情報化」には，一定の進捗が見られるようになった。一方で，以前より使用してきた学校独自のシステム以外使用したことのない教員や，そもそも校務をコンピュータで処理したことのない教員が，「校務の情報化」になかなか取り組めずにいるという側面も浮き彫りになってきている。

そこで，主に各校の情報教育担当者がリーダーとなって取り組める，校務の情報化に関する研修モデルを開発し，実践検証していくことで校務の情報化の推進を目指すこととした。

キーワード：教育の情報化　校務の情報化　校内研修　調査アンケート
研修モデル評価　情報教育担当者

1　はじめに ………………………………………… 35
2　研究の概要 ………………………………………… 35
3　研修モデルの開発と実践による検証 ………………… 38
4　実践検証校以外での取り組み ………………………… 48
5　研究の成果と今後の課題 …………………………… 53

１　はじめに

平成２２年，文科省が発表した「教育の情報化に関する手引」には，「教育の情報化」とは，「情報教育」「教科指導におけるＩＣＴ活用」「校務の情報化」の３つから構成され，これらを通して教育の質の向上を目指すものであることが示されている。その３つの柱のうちのひとつである「校務の情報化」の目的は，効率的な校務処理とその結果生み出される教育活動の質の改善にある。校務が効率的に遂行できるようになることで，教職員が児童生徒の指導に対してより多くの時間を割くことが可能となる。また，各種情報の分析や共有により，今まで以上に細部まで行き届いた学習指導や生徒指導などの教育活動が実現できるなど，様々な恩恵を受けることができる。このように校務の情報化は，ますます進展する情報社会において，ＩＣＴを有効に活用して，よりよい教育を実現させるためのものである[*1]。

本市における「校務の情報化」の進捗に関して言えば，昨年度より小・中・特別支援学校において，統一された校務支援システム（スズキ校務）が導入されたことで，各校において差異のあった「校務の情報化」の足並みが揃いつつある状況である。一方で，以前より使用してきた学校独自のシステム以外使用したことのない教員や，そもそも校務をコンピュータで処理したことのない教員が，校務支援システムになかなか取り組めずにいる，という状況も生まれている。

また，本部会では昨年度まで，「学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラム」の開発に取り組んできたが，その結果，各校の情報担当者が自校の課題に応じて研修を開発し，自ら講師役となり研修を持つことが，教員の学校情報セキュリティに関する意識の向上に対して，一定の効果があるということがわかった[*2]。

以上をふまえると，校務の情報化に関する研修モデルを開発し，教員を研修によってフォローしていくことが，校務の情報化の推進，ひいては本市における「よりよい教育」の実現に向けて重要であると考えられる。

２　研究の概要

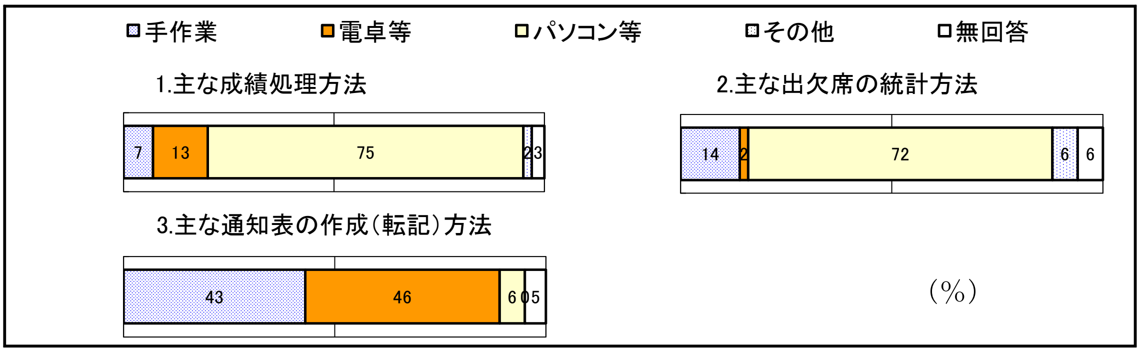
（１）　研究テーマ

校務の情報化推進についての研究
～校務の情報化に関する研修モデルの開発と検証～

（２）　テーマ設定の理由

本年度，一部小・中学校（小２校・中３校）を対象に実施した，校務の情報化に関する実態調査の結果を次に示す。まずは，校務支援システム（スズキ校務）が導入される以前の校務への取り組みについての設問である（グラフ１）。

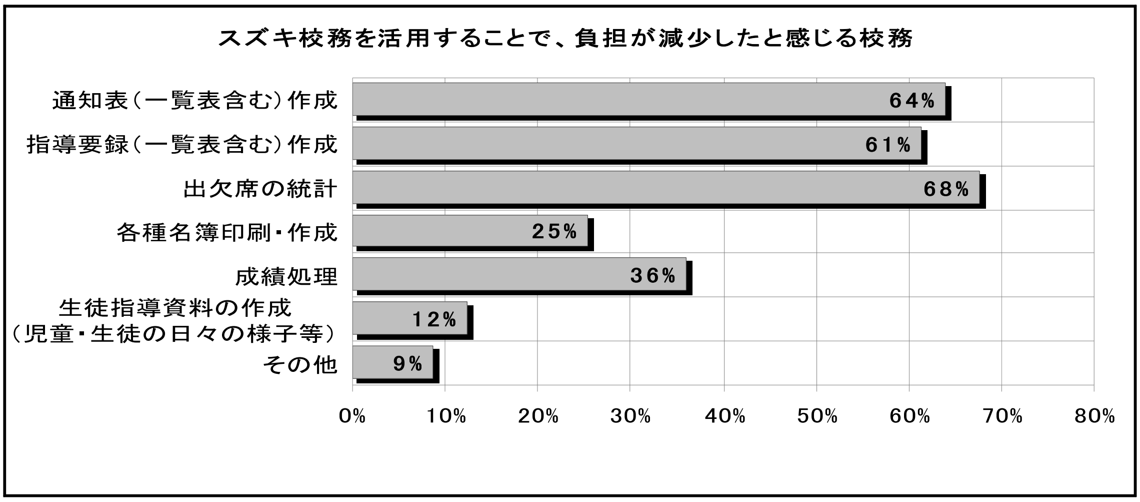
設問１と２においては，パソコンを用いて取り組んでいた者が７割を超えており，スズキ校務導入以前から，ある程度情報化が進んでいたことがわかる。一方，設問３においてはパソコンを用いて取り組んでいた者が６％に留まっており，情報化が殆ど進んでいないという状況であった。



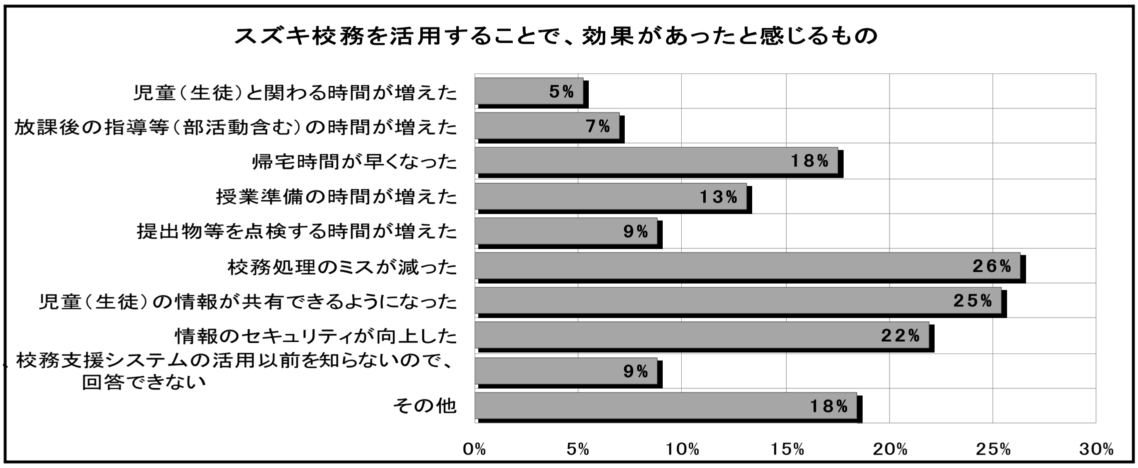
【グラフ１：スズキ校務導入以前の校務への取り組み状況】

次に，スズキ校務活用による校務の負担軽減に関する設問では，６割以上の教員が通知表作成機能・指導要録作成機能・出欠席の統計機能を活用することで校務の負担が軽減していると感じている。一方，成績処理機能を始めとしたその他機能を活用することによる負担軽減については，４割以下に留まっている（グラフ２）。

スズキ校務活用の効果に関する設問においては，「校務処理のミスが減った」の２６％が最大であり，スズキ校務の活用効果については，多くの者があまり効果を実感していない状況であると言える（グラフ３）。



【グラフ２】



【グラフ３】

また，本研究部会では昨年度まで，教員の情報セキュリティ意識を高めるとともに，組織としても個人情報等の重要な情報を守る確かな取り組みができるよう，主に各校の情報教育担当者がリーダーとなって取り組める「学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラム」の開発に取り組んできた。開発した研修モデルには，以下の特徴がある。

・ウィルス被害や情報漏えいなど，昨今話題となっており，且つ学校の実態に即したものを研修課題とする。
・１回の研修は１５～３０分程度であり，会議等の後にも短時間で取り組める。
・絵図を多く取り入れた，わかりやすいパワーポイントのスライドを提示資料とする，等。

開発した研修モデルを実際に校内研修で用いたところ，学校情報セキュリティに対する意識の向上に一定の効果があることがわかった。

以上のことから，本研究部会では，「学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラム」開発のノウハウを生かした「校務の情報化」研修モデルを開発・実施することで，スズキ校務導入以降における，校内の校務の情報化推進に一定の効果をあげることを目的とし，本研究テーマを設定した。

（３）　研究の方法

１．研修モデルの位置づけ

本年度実施した校務の情報化に関する実態調査をもとに，どのような内容の研修が必要であるかを検討し，その中から，取り組みやすいもの，それぞれ研究部員の所属する学校において今必要なものを中心にモデル化する。

１つの研修モデルは，１５分から３０分程度の研修時間を目安にした内容量で作成する。これは，日々忙しい現場において，校内でリーダーとなる情報教育担当者等が準備しやすく，研修を受ける側にも負担を少なくする必要があると考えたからである。実際には職員会議や校内研究会の前後を活用する等，それぞれの学校の実情に合わせた研修が可能となる。その上，パワーポイントを利用して作成した提示資料の内容量も少ないので，ソフトの扱いに少し慣れた人であれば，データを自分なりに修正しやすい等の利点がある。

２．研修モデル作成の流れ

① 研修内容の検討（大学准教授による指導助言）
- 本市の校務の情報化に関する課題
- 形態，場所，環境の課題

② 研修モデル資料の作成
- 資料作成のための情報収集
- 提示資料（パワーポイントのスライド）
- 配布資料（研修時に利用するもの：基本的に提示資料の印刷物）
- 研修の流れ（研修リーダー用）
- 本研究部員による意見交換

③ 評価及び調査アンケートの作成（大学准教授による指導助言）
- 研修モデル評価アンケート

・　実態調査，意識等変容調査

④ 実践による研修モデルの検証

・　研修実践

・　研修モデルの評価及び調査の実施

⑤ 再度研修モデル資料及び内容を修正

３．研修モデルの評価の方法

研修モデルの評価については，次の２つの方法で取り組む。

【方法１】研究協力校複数校において，研修を実施し，研修を受けた教職員への研修直後のアンケート調査により,作成した研修モデルにおける提示資料(デジタル資料)，配布資料，研修内容がわかり易かったか，よく理解できたか等について個々の評価を記入してもらう。

【方法２】研究協力校複数校において，研修直前と研修後１ヶ月程度経過時の個々の意識や実態を調査，比較することによって，理解の定着度や行動の違いについて明らかにするとともに，意識向上に効果的か等について評価する。

３　研修モデルの実践による検証

（1）　実践事例　１（小学校）

１．研修テーマ

「校務の情報化研修～校内ネットワークについて，ご存知ですか？」

２．研修の目的

現在，市内の小学校現場においては，「スズキ校務」が導入されたり，校内のネットワークが教室系と職員室系の２つに切り分けられたりしている。教室系のファイルサーバーはコンピュータ室，職員室系のファイルサーバーは職員室に設置されている。今回の研修では，主として職員室のネットワークを取りあげた。その概要や構成を簡単に紹介し，ネットワークによって情報が共有できることを「スズキ校務」の機能を例に挙げて認識してもらうことをねらいとした。

本研修で行った「共有フォルダ利用における留意点」を知ってもらうことで，フォルダの整理を心がけることができ，今後の業務を円滑に進められると考える。さらに「スズキ校務」については，事前のアンケート調査によって『一部の機能（出席簿やテストの得点入力）については利用しているが，その他の機能（名簿作成や日々の様子）については活用が十分ではない』という結果が出た（図１）。今後の「スズキ校務」のさらなる活用のために，まずは本研修において利用頻度の低い機能の紹介をすることとした。

３．研修の内容

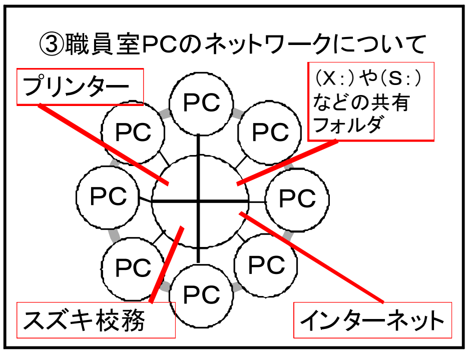
【研修の展開】

活　　　動	留　意　点
1.課題を確認する。 ①「スズキ校務」の日々の利用状況 ②「日々の様子」機能の紹介	・今回の研修の課題を提示し，研修の流れを確認する。

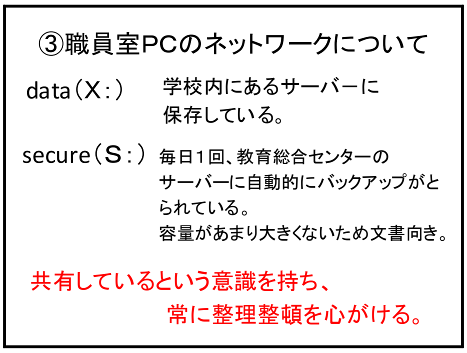
③「名簿印刷」について ④職員室ＰＣのネットワークについて	
2. スズキ校務利用における事前アンケートの結果を確認する。	・「日々の様子」機能の活用や，「名簿印刷」の活用が十分ではないことを押さえる。
	①スズキ校務　日々の利用状況 通知表（一覧表を含む）作成：14人（66%） 指導要録（一覧表を含む）作成：12人（57%） 出欠席の統計：13人（61%） 各種名簿印刷・作成：12人（57%） 成績処理：13人（61%） 生徒指導資料の作成（児童の日々の様子等）：0人（0%） 【図１】
3. 名簿印刷について確認する。	・職員室内のネットワークを活用することで，名簿印刷が容易にできることをおさえる。
4. 職員室内のネットワーク構成や，共有フォルダの活用について確認する。	・職員室内のネットワークについてスライドを用いて提示する。 ・X ドライブとＳドライブの違いについておさえる。 ・フォルダやファイルの整理について留意することをおさえる。
5. まとめ	・本研修の課題・内容を振り返りながら確認する。 ・「スズキ校務」や「校内ネットワーク」を活用することで，業務の円滑化を図ることができることをおさえる。

本研修では，まず始めに「スズキ校務利用における事前アンケートの結果」を確認することで，課題や研修内容に対する意識をもってもらう（図１）。

「日々の様子」機能については，それぞれの児童についての日々の気づきや表彰などの事項を記録することで，『あゆみ』や『指導要録』作成時により具体的に記述するための資料として活用できることを伝える。さらに職員室内のネットワーク構成や共有フォルダについて確認（図２）し，「名簿印刷」や「ファイルの共有」について活用を促した。「共有フォルダ」については活用することに利点もあるが，フォルダの整理やサーバーの容量など留意すべき点も説明（図３）し，職員の意識の向上を図った。



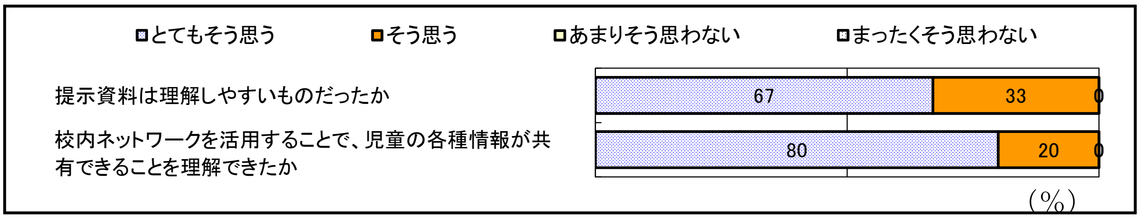
【図２】



【図３】

4．研修モデルの評価

研修の形態としては，普段スズキ校務を利用する職員室という場所で行うことにより，すぐに自分の手元のコンピュータで確認することができるようにした。研修中は，常に確認や問いかけるような話し方を心がけることで，問題意識を継続して持てるようにした。そうすることで受講者としても，研修内容を自らの課題として確認することができ，「もっと活用してみよう」や「もう少し細かい部分を知りたい」という今後の課題意識につなげることができると考えた。また，プレゼンテーションによる提示資料の見やすさや，スライドの枚数などは適切であり，研修時間も業務に大きな支障のない程度にすることができた。研修直後のアンケートにおいても，概ね良い反応を得ることができた（グラフ４）。



【グラフ４】

しかし，内容を「伝達」に絞ってしまったため，受講者に実際に操作してもらう「演習」を取り入れておらず，操作そのものが課題の受講者や，関心を持ちにくい受講者にとっては退屈な研修になってしまった。研修内容をその場で実際に操作しながら確認することで，より具体的に研修を理解することができると考える。

5．研修モデルによる教員研修の効果と考察

研修の直後アンケートで，『意識が高まった内容』の自由記述欄には，「職員室ＰＣのネットワークについてよくわかりました」や「もっとスズキ校務を活用しようと思った」，「日々の様子機能を使うことで，生徒指導記録として利用できることがわかった」など利用に前向きな意見が多くなった。一方では，「今後活用していく中で理解を深めていけると思う」や「演習があるともっと具体的に利用法が理解できると思う」，「日々の様子を教室でも入力できるようになればいい」など，今後活用する上での課題とも言える意見もあった。今回の研修内容は主に機能の紹介ということに重点を置いたため，操作等のより具体的な研修ではなかった。今後も，このような各校の実態を踏まえた研修を実施することで，職員全員が操作に慣れるとともに，業務の中でスズキ校務や校内ネットワークを有効に活用できるのではないか

と考える。

（２） 実践事例　２（中学校）

１．研修テーマ

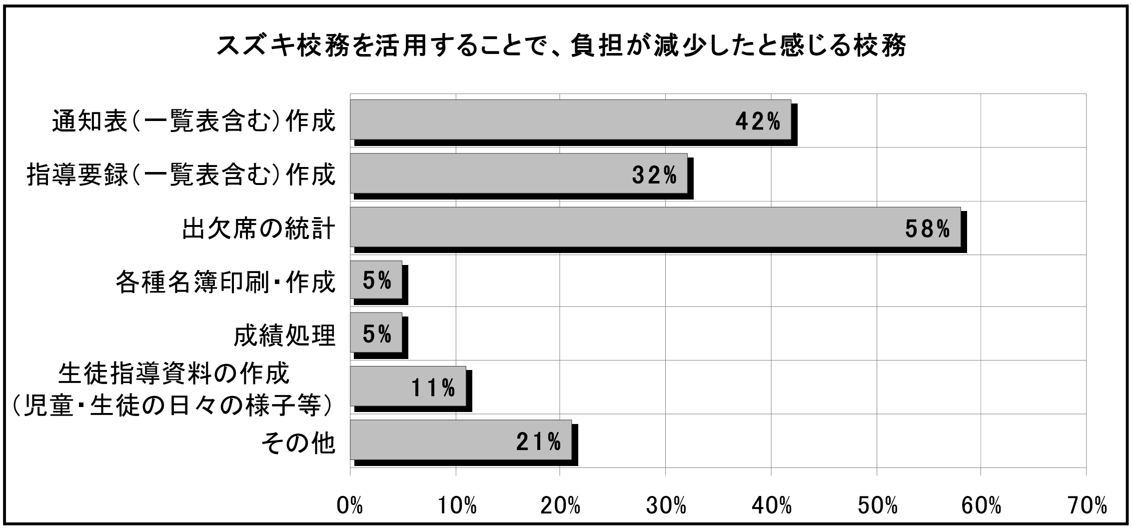
「スズキ校務を使った成績処理の方法　～素点と評価・評定の入力・貼り付け～」

２．研修の目的

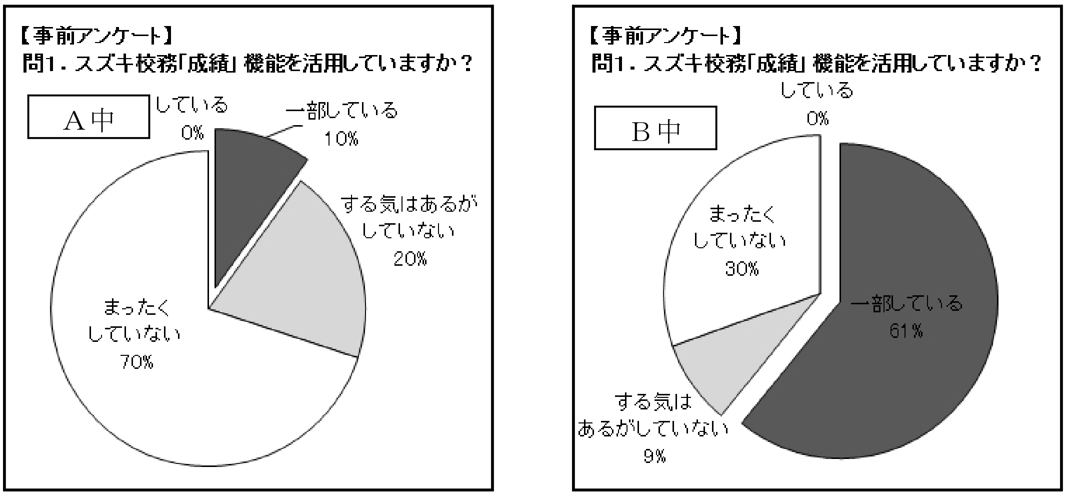
本校ではスズキ校務が導入された昨年度から今年度１学期において，活用される機会が少なかった。出席簿と通知表の所見欄に関しては，学級担任ならば必ず扱う必要がある。しかし，それ以外での利用はあまり無く，特に通知表の成績欄に関しては，全員が操作できるようになるための研修の機会を持つことも難しく，評価・評定の入力作業を，従来使用していた入力用ファイルから情報担当が全学年の全教科についてのデータをコピーするという方法で一人で行っている現状があった。

スズキ校務を使っていない理由のひとつに，スズキ校務にどのような機能があるか知らないということがあげられる。これまでそれぞれが使用していたシステムではなく，スズキ校務を活用した結果，メリットがあると実感がわかなければ，使おうという気にはならない。研修テーマを設定するにあたり，スズキ校務を活用してみようというきっかけになるものが必要だと考えた。

校務の情報化に関する実態調査の結果から，本校のデータを抽出してみると，成績処理の項目について，あまり負担が軽減したと感じていないことがわかった（グラフ５）。また，他校と比較しても，「成績」機能の活用度合はかなり低い（グラフ６）。今回は，成績処理や学期末の事務処理を全教員でよりスムーズに回せるようにするため，説明しながら操作をする短時間の作業型の研修を，２学期の期末試験直前に行った。



【グラフ５】



【グラフ６：A中（本校）とB中の比較】

３．研修の内容

①　スズキ校務活用の効果について

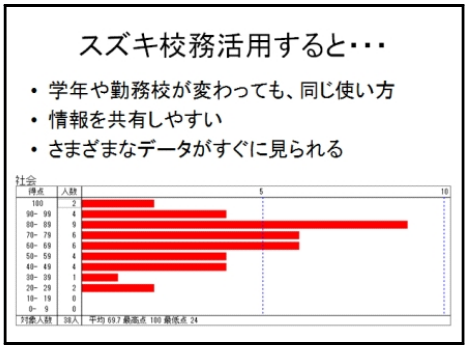
　スズキ校務にはさまざまなメリットがあるが，３点について話をした（図４）。①学年や勤務校が変わっても同じ使い方であること②情報を共有しやすいこと③さまざまなデータがすぐに見られることである。中学校では，これまで学校や学年独自の成績処理システムを使用していることが多く，統一されたものが無かった。そのため異動のたび新しいシステムを理解する必要があった。特に，データ入力後，ボタン１つでさまざまなグラフが集計でき，わかりやすく表示されることについては知らない人が多いようで，良い反応が得られた。

②　「試験入力」の操作方法について

　点数入力の方法として，観点別の入力と素点のみの入力ができることを説明し，直接入力とエクセルファイルから貼り付ける操作を行った。

③　「教科担任用成績入力」の操作方法について

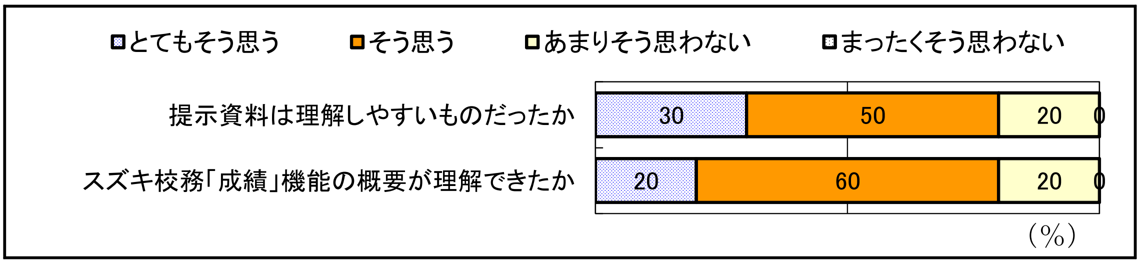
　評価を入力すると，評定が計算され，通知表に反映されること説明し，直接入力とエクセルファイルから貼り付ける操作を行った。



【図４】

４．研修モデルの評価

　研修時，スズキ校務の成績処理機能を初めて使用する人がほとんどであった。したがって，作業型の研修にしたことは，イメージを持ってもらうのに効果的であったと考える。研修直後のアンケート結果も概ね良好で，スズキ校務を使うことに関して前向きに捉えてもらうことができたようである（グラフ７）。

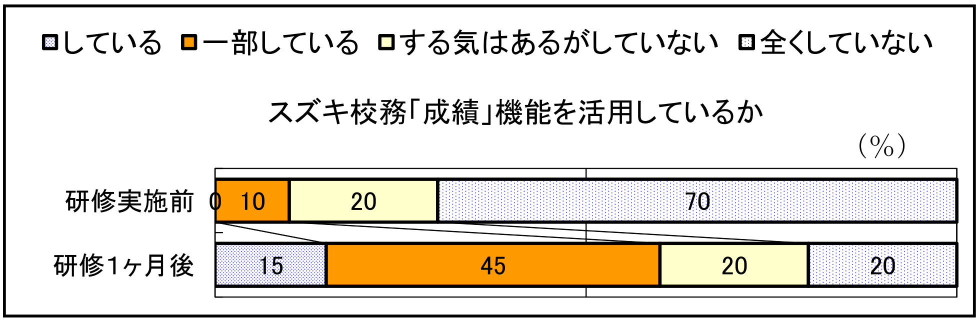


【グラフ７】

５．研修モデルによる教員研修の効果と考察

「成績」機能を活用している，または一部している割合が，研修前は１０％であったのに対し，研修１ヵ月後アンケートでは６０％になった（グラフ８）。また，通知表に反映される，「教科担任用成績入力」からの評価・評定の入力については，全て教科担任が入力作業をするようにお願いした（図５）。手順について資料を作成し配布したので，スムーズに作業が行えた。これまで通知表への入力を担当していた方からは，「負担が減って大変楽になった」という感想をいただいた。職員全体でスムーズに期末処理を行うという点に関しては，ひとつのきっかけとなる意義のある研修ができたと考える。

【図５】



【グラフ８】

【研修直後アンケート】より

・評定の入力が一人に負担がかかっていたので，それが解消されることは良いことだと思う。

・こんなに便利なものがあるとは知りませんでした…。４月に知っておきたかったです。明日から使います。

・評価する対象の点を入れると通知表までつながることがわかった。

・使い方が理解できたので，使えると思う。

研修１ヵ月後のアンケートからは，課題も見えてきた。「活用しやすいようにマニュアル集がほしい」「使い慣れたエクセルファイルがあるから，なかなか変えることができない」という意見からは，各校にマニュアルが１冊ずつ設置されているが，活用されていないという状況が浮き彫りとなった。その背景には，毎日忙しく，じっくりと新しいものに手を付ける余裕が無いという現実がある。今回のような短時間の研修を数回設定することで，さらに活用の幅が広がるのでは，と考える。

（２） 実践事例　３（中学校）

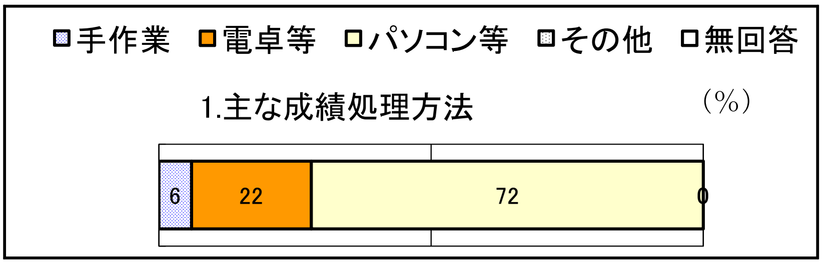
１．研修テーマ

「スズキ校務を利用して成績処理を行う」

２．研修の目的

本研修は，校務の情報化を学校内で促進することを目的としている。「校務の情報化」と一口に言っても，その内容は多岐に渡る。今回の研修では多種多様な校務の中から，主として成績処理にテーマを絞ることにした。成績処理は全ての教師にとって関わりの深い作業であるとともに生徒自身にも直結する極めて重要な校務作業である。

しかし，成績処理の方法は，各教員によって様々であり統一されていない状態にある。下のグラフは，校務の情報化に関する実態調査の結果から，本校のデータを一部抽出したものである。スズキ校務導入以前から，パソコンで成績処理をしていた者は72%いたが，全体の２８％が成績処理を手作業もしくは電卓等で行っており，処理の方法が様々であることを示している（グラフ９）。



【グラフ９：本校における，スズキ校務導入以前の主な成方法績処理方法】

またパソコン等を使用して成績処理する場合においても，学年や教科によって成績処理の方法は統一されていない。この場合，各教科や学年ごとにエクセルなどの表計算ソフトに堪能な教員が，成績処理のために計算式などを作成し，それを学年内もしくは教科内で共有している例が殆どである。この場合，もしも使用している関数やマクロ等が崩れてしまった場合，パソコンに堪能ではない教員が間違った成績処理を行ってしまうリスクが生じてくる。

その対処法として，市内で統一されたシステムを使用して成績処理を行うという方法は非常に有効である。尼崎市においても，校務支援システムとして「スズキ校務」が取り入れられたが，直前アンケートでは，スズキ校務の成績機能で成績処理を行っている率は０％であり，一部活用している職員についても全体の６１％であった。

記述式のアンケートからは，「慣れ親しんできた成績処理方法から，異なる処理方法への乗り換えは大変である」という声や「パソコンに堪能ではないため，解説書を読んだだけでは具体的な使用方法が分からない」といった声もあった。

今回の研修は，以上のような課題を踏まえて，第一に，スズキ校務による成績処理方法について職員への理解を深めることを目的として実施した。また，そのことに付随する形で，校務支援システム（スズキ校務）を活用することによって，校務の負担軽減が期待できることを職員間に周知させた。さらに，成績処理において自前のソフト（エクセルなどの計算式）を活用する上でのリスクについても周知させることを目的として実施した。

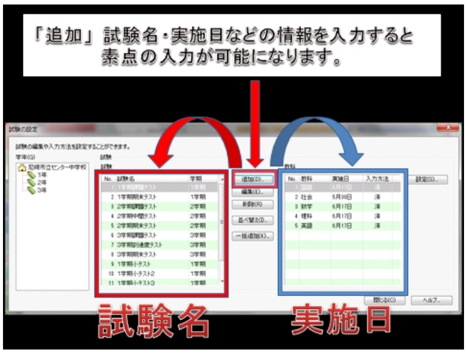
３．研修の内容

【研修の展開】

活　　　　動	留　　意　　点
1. 研修の課題を知る ①独自のソフトを使用した成績処理に伴うリスクについて知る。 ②校務支援システムのメリットについて理解する。 ③スズキ校務を使用した成績処理の方法について知る。	・今回の研修の課題を提示し，研修の流れを確認する。 ・教員が独自に開発した成績処理ファイルに伴うリスクについて説明する。 ・転勤などで勤務校が変わった場合においても，市内で統一されたスズキ校務を使用することによって安定した成績処が行えることを確認する。 ※スズキ校務を利用することによって生じるメリットについて具体的にイメージできるように心がける。
2. スズキ校務を使用した成績処理の方法について知る。	・パワーポイントを使用し，実際のパソコン画面をスクリーンに投影した上で操作方法について解説を行う（図６）。 【図６】
3. スクリーンに投影された資料に従って，実際に成績処理機能を操作する。	・パソコンに不慣れな先生方に躓きが生じないよう，全体の理解度・操作手順等を机間巡視などで確認しながら解説を進める。
4.　まとめ	・本研修の内容を振り返りながら，質疑応答を行う。

本研修においては，まず初めに校務支援システムを活用した成績処理におけるメリットについて説明を行う。第一にセキュリティーの安全性についてである。各自のパソコンやＵＳＢ等を使用した成績処理と比較して，校務支援システムを活用した成績処理は，データが教育総合センターのサーバーで保管されるため個人情報流出のリスクを回避することができる。第二に成績処理の際に生じるミスの回避である。パソコンを使用して成績処理を行っている教員の殆どは，各学年や各教科などで独自に開発した成績処理ファイルを使用して成績処理を行っている。この場合，もしも使用している関数やマクロ等が崩れてしまった場合，パソコンに堪能ではない教員が間違った成績処理を行ってしまうリスクが生じてくる。校務支援システムを活用すれば，このようなリスクは回避することができる。第三に成績処理における安定性である。スズキ校務は市内全体で統一されて活用されているシステムであるため，転勤などに伴い職場環境が変わった場合においても前任校と同じ手順で安定して成績処理を行えるメリットがある。以上のようなメリットについて，職員に理解を求めた上で，具体的な操作手順について解説を行った。

【図６】



【図７】

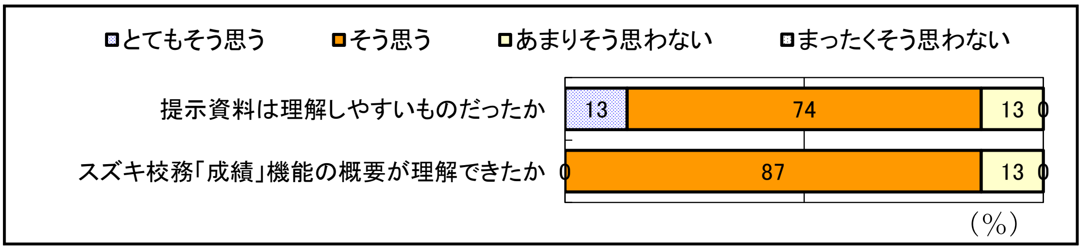
成績処理の操作手順については，プロジェクターを使用して実際の操作画面をスクリーンに投影した上で解説を行った（図６）。

この解説の際には，スクリーンの画面に合わせて，教職員全体が同時に成績処理の操作を実践できるように心がけた。研修で学んだことを実践することによって，成績処理の方法についてより理解が深まると考えた。また，スクリーン上の映像は，パソコンに不慣れな方でも理解し易いように，実際の操作画面に加工を施し矢印や注釈を挿入することによって，操作手順の可視化を図った（図７）。

４．研修モデルの評価

本研修実施直後に，上記したようなアンケートを行った。研修で提示した資料については全体の８７％から「とても理解しやすかった」「理解しやすかった」との回答を得ることができた。また記述式のアンケートの回答としては，「資料がカラーだったので見やすかった」等の意見が見られた。改善点としては，「（後方の座席の職員にとって）文字が見えづらかった」という意見や「仮のデータを事前に用意して頂き，それを活用して実践を行いたかった」というような意見も出された。スクリーンの画像を後方の座席の教員にも認識できるように改善するとともに，仮データを利用しながら実際の計算の練習を行う場面を設定することによって，より受講者の理解が深まるのではと考える。

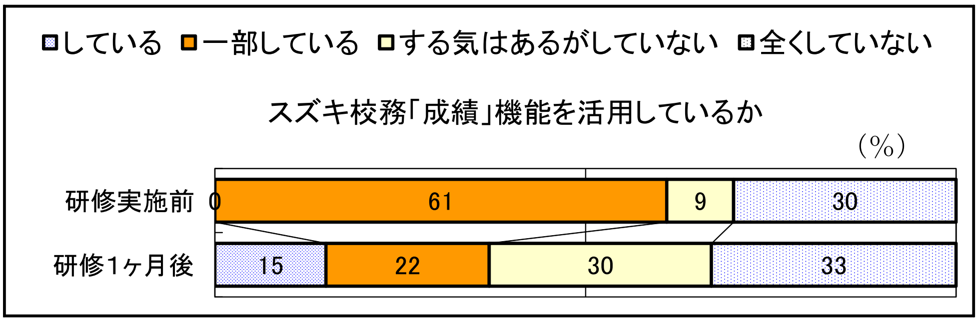
また，成績処理機能の概要については，全体の８７％から「理解できた」との回答が得られた。同じく記述式のアンケートの結果からは「今までエクセルの計算式がなくならないように，細心の注意を払って成績処理・データの取り扱いをしていたのですが，これが使えると安心できます。」といった回答や「操作が思った以上に簡単だということがよく分かった」というような概ねシステムに対して好意的な回答を得ることができた。その反面，「活用に至るまでに時間がかかりそう」という意見や「このようなシステムの活用は，具体的にいつまでにこなせるようにならないといけないのか？」というようなパソコンに不得手な職員の不安の声も聞かれた。(グラフ１０)。



【グラフ１０】

５．研修モデルによる教員研修の効果と考察

本研修の一ヶ月後，研修に参加した職員を対象として「校内研修を受けて以降，スズキ校務「成績」機能を活用していますか？」という内容でアンケートを行った。その結果，「している」と回答した職員は１５%，「一部している」と回答した職員は22%，「やる気はあるがしていない」と回答した職員は３０%，「全くしていない」と回答した職員が３３%であった。研修前の事前アンケートではスズキ校務「成績」機能を活用している職員は０%であったが，「活用している」と回答した職員が１５%にまで増加した。反面，「一部している」が減少し，「する気はあるがしていない」「全くしていない」が増加する結果となった（グラフ１１）。このような結果となったのは，スズキ校務にエクセルで処理した数値をただ貼り付けることを，「成績処理機能の活用」と誤認していた者が多数いたためであると考えられる。それは，研修後の記述式のアンケートに，「そもそもスズキ校務の成績処理機能を誤解していた」という意見が多数寄せられたことからもわかる。



【グラフ１１】

他にも「４０人を半分に分けてハーフクラスで授業を行っているのですが，各クラスの一部だけを抜き出して成績処理が可能なのか，知りたいです」や「特別支援

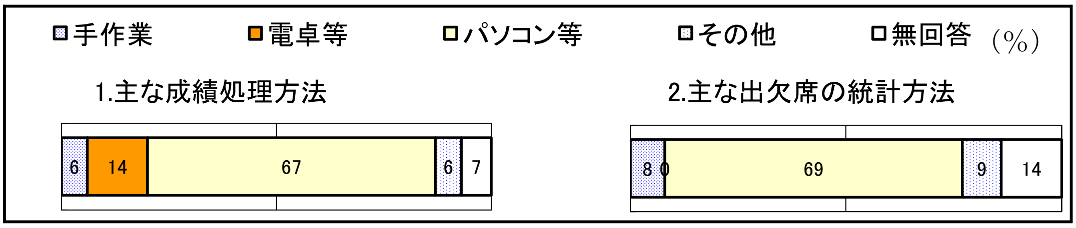
担当で，２年・３年各１名ずつ３教科（国・数・英）を指導しているが，帳簿が別になっているので，あまりデータ処理の便利さがない」といった具体的な質問や反応が出てくるようになった。今回，はっきりとした活用率の増加を見ることはできなかったが，具体的な質問が出てきたのも，研修によって，職員の認識や関心が以前よりも深まった結果と考えられる。

４　実践検証校以外での取り組み

（１）　取り組み１（小学校）

１．学校の概況

　スズキ校務導入以前の「校務の情報化」に関するアンケートを元に考察を進めていく。まず，本校ではスズキ校務導入以前から独自のシステムによる，校務の情報化が進められていた。それは成績処理にパソコンを使っていた者が６３％，出欠席の統計でのパソコンを使っていた者が６９％という割合（グラフ１２）からもわかる。故にパソコンを使っての処理についてある程度は慣れていたという状況がある。



【グラフ１２：本校における，スズキ校務導入以前の校務への取り組み状況】

　以下，本校の校務の情報化がどうなされてきたかについて，ネットワークの活用・職員研修・各種名簿の連動・各分掌との連携という４つの観点で述べていきたい。

２．ネットワークの活用

　ネットワークの活用を進めるにあたり，大前提になるのが「一人一台のパソコンがある」ということである。本校では，これまで学年に対して貸与されてきたＰＣが個人への貸与と変わったことにより，ネットワークを活用しての校務推進が容易となった。

　一人に一台無いと人によって差を生じさせることになる。その回避措置として，例えばこれまでデータ移行の際には，ＵＳＢメモリーによる運用が不可避であった。しかし，一人一台の実現により全てのデータを学校サーバーで一括管理することが可能となった。そうすることで様々なファイルの共有が可能となり，業務内容の蓄積に職員全体で関われることや，分掌の円滑な引き継ぎが可能となった。個人が職務で作ったファイルは学校全体の資産となった。

　更に，職員間の通達等では，印刷をせずファイルの閲覧を義務付けることによる，「ペーパーレス」化も模索されている。

３．職員研修

　スズキ校務の職員研修においては，システム導入の過渡期における職員の煩わしさをいかに減少させるか，ということも課題のひとつであると考える。よって本校

では，情報担当が職員に必要と思われる研修を，その都度負担にならない程度に行ってきた。その方法としては，設定の変更等の難度が高い操作については，情報教育部の者で担当し，個人による操作が必要なところだけ研修を行い，時間も１回に１時間程度，また講義形態ではなく，演習形態を専らにするという内容で何度か行ってきた。しかし，元々の本校の状況からも，パソコンでの処理に慣れた者が多く，それほど移行に対しての混乱は見られなかった。それは後述するアンケート結果からも見て取れる。

パソコンそのものが不得手であり,スズキ校務になかなか取り組めない職員もいる。そういう職員は学年団等でそのフォローができれば良いのではないか。要は一人ひとりが全てを運用できること自体に目的をおくのではなく，全体として如何に負担が減ったのかを確立することが必要なのだと考える。

４．各種名簿の連動

これまでの学校の各種名簿等（児童名簿，学級編成名簿，学級編成カード，兄弟学級交流名簿等）を，その様相を著しく異にすることなく，スズキ校務に連動させることは急務であった。

それにはスズキ校務そのものの名簿作成自由度の高さ，蓄積データの豊富さが大変役立った。また，これらのことについては，担当者が各種データ間の連動の仕組みを捉えていなければならないと考える。

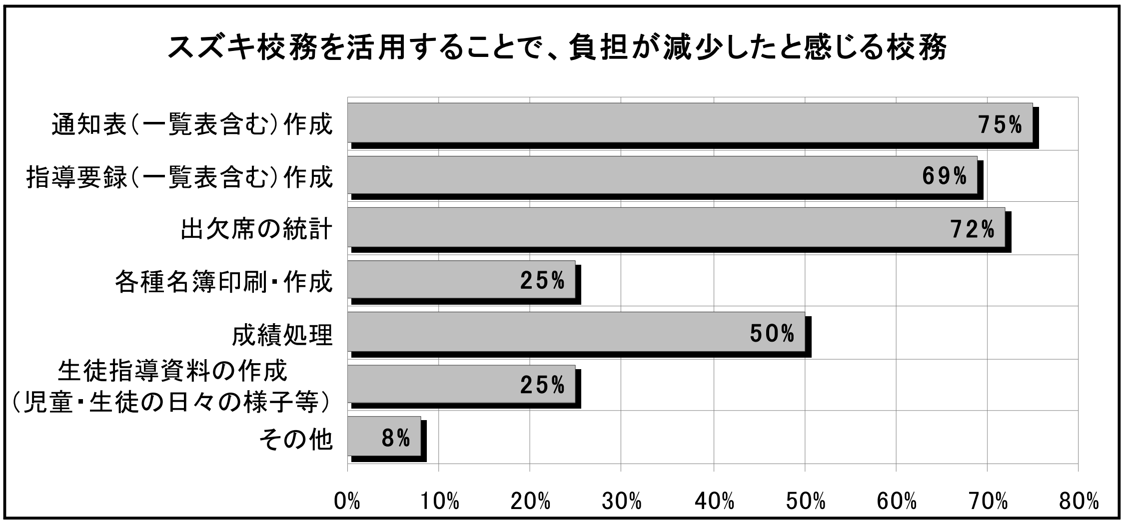
５．各分掌との連携

各分掌との連携として，本校では生徒指導部との連携を行った。生徒指導部では，月毎の問題行動を部内で報告することや，学期毎の要支援児童の情報交換会を全体で行っている。これらの報告書を全てスズキ校務に移行したのである。

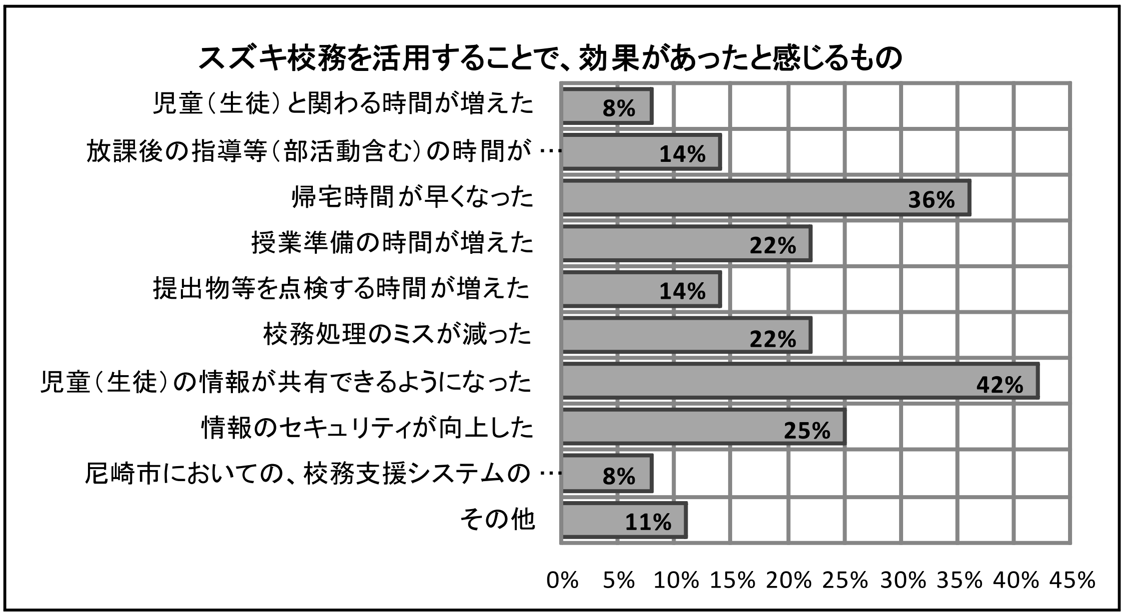
スズキ校務には児童の写真だけではなく，諸々のデータがあるため分かり易い。また，これまで紙面の書類の場合はマル秘資料のため全体会の後回収，破棄されたが，スズキ校務の場合はいつでも閲覧できるので，情報の共有化が容易である。

６．今後について

アンケートの結果を考察するに，負担が減少したと感じる校務は多いものの（グラフ１３），効果についてはあまり高い数値とはいえない（グラフ１４）。効果の高さを全職員が実感できるよう運用の改定を行わなければならないと考えるものである。それには，現行の運用を維持・整備していくのみに留まってはならない。



【グラフ１３】



【グラフ１４】

今後も本校では以下の点での運用が模索されている。

① 各分掌との連携強化

・食育部会（栄養教諭）

→アレルギー児童の情報を新たな欄を作って詳細名簿に書き込む。

・保健部会（養護教諭）

→児童の状態で皆が周知してほしいことを詳細名簿に書き込む。

② 詳細名簿における検索機能の活用

→数多くある項目から，該当者を効率良く抽出できる。

③ ＴＯＤＯの活用

→教頭や教務と連携しながら，各種スケジュールを管理する。

以上のような取り組みを少しずつ実現していき，業務をできるだけスズキ校務に

集約していくことで，効率化を図っていきたいと考えている。

（２） **取り組み２（中学校）**

１．研修テーマ

「スズキ校務による成績処理　～同一観点内の評価対象に対する重み付け～」

２．研修の目的

本校では，学期末の成績処理において，各教員がそれぞれ手作業で行うか，またはエクセルなどのソフトウェアを用いている場合が多く，スズキ校務を用いて成績処理をする教員はまだまだ少ない現状があった。しかし，教員が他校へ異動した時や，同じ学校内でも他学年へ移った時を考慮すると，尼崎市内の全学校，全学年で，同じシステムによる一貫した成績処理を行える方が，スムーズに業務が進むと考えられる。また，情報セキュリティの観点からも，スズキ校務による成績処理の普及は急務であると考える。そのため，本研修ではスズキ校務を用いた成績処理の方法と，その際の留意点を周知させることを目的とした。

３．研修内容

各観点の評価を出す際，スズキ校務が採用している計算方法においては，全ての項目の重み付けが等しくなっている。例えば定期テストの得点率と小テスト等の得点率が同一に扱われ，その平均値で評定されることとなる。そのため，重み付けの設定を行い評定をすることを最大の留意点として，研修を実施する。

【研修方法】

※本研修では，よりわかりやすくするため，自身の担当教科に関わらず，全員が中学校数学科の４観点(関心・意欲・態度，見方・考え方，技能，知識・理解)について演習を行い，同一観点内の評価対象は，関心・意欲・態度についてのみ増減させるものとする。

① 架空の得点データ（図７）を研修用に準備し，その得点を，同一観点内の評価対象が１つしかない場合（図８）と同一観点内の評価対象が複数ある場合（図９）にそれぞれ入力する。

② スズキ校務の設定を想定した演習用シートに得点を入力（図１０）し（図９）の場合と比較して，関心・意欲・態度の到達度と評価が異なっていることを確認する。

③ ②で起こった問題の解決方法として，同一観点内の評価対象に対する重み付けを行う。まず，図１０では同一観点内における重みが全て１．０になっていることを確認してもらい，この重み1.0を各評価対象の満点の比率で重み付けをしてもらう（図１１）。しかしこの重みは，０．０から２０．０の間でしか設定できない。今回の研修データでは，３つの評価対象の比が，３６：１８：１０であるが，これをそのまま重みとして入力はできないので，３．６：１．８：１．０と入力する。

④ 図9と図１１の結果が同じになっていることを確認する。

【関心・意欲・態度の到達度の計算方法】

得点入力データ

【図７】

		関心･意欲･態度		
番号	氏名	問題集	小テスト	態度
21XX	○○　○○	34	15	3

観点内項目1つ

【図８】

観点名		関意態	関心･意欲･態度	
評価対象		全素点合計	到達度	評価
満点		64		
番号	氏名			
21XX	○○　○○	52	81.3	A

観点内項目複数

【図９】

観点名		関意態			関心･意欲･態度	
評価対象		問題集	小テスト	態度	到達度	評価
満点		36	18	10		
番号	氏名					
21XX	○○　○○	34	15	3	81.3	A

・図８と同様に素点合計を満点合計で割り、到達度率を出したもの

スズキ校務(重み付けなし)

【図１０】

観点名		関意態			関心･意欲･態度	
評価対象		問題集	小テスト	態度	到達度	評価
重み		1.0	1.0	1.0		
満点		36	18	10		
番号	氏名					
21XX	○○　○○	34	15	3	69.3	B

・スズキ校務の標準の重み付けによるもの
・【問題集：小テスト：態度】→【１：１：１】

スズキ校務(重み付けあり)

【図１１】

観点名		関意態			関心･意欲･態度	
評価対象		問題集	小テスト	態度	到達度	評価
重み		3.6	1.8	1.0		
満点		36	18	10		
番号	氏名					
21XX	○○　○○	34	15	3	81.3	A

・重み付けを変更したもの
・【問題集：小テスト：態度】→【３６：１８：１０】

スズキ校務(重み付けあり)

【図１２】

観点名		関意態			関心･意欲･態度	
評価対象		問題集	小テスト	態度	到達度	評価
重み		4.0	2.0	1.0		
満点		36	18	10		
番号	氏名					
評価対象	○○　○○	34	15	3	82.1	A

・重み付けを変更したもの
・【問題集：小テスト：態度】→【４：２：１】
・評価対象ごとに到達度を出し、その項目ごとの重みで評価をする

４．研修モデルの評価

研修直後のアンケートでは，６９％の職員が「よく理解できた」または「理解できた」と回答している。本研修では，重み付けをすることで問題が解決できるという点のみを重要視し，上記の計算式等は難しいイメージを植えつけることになると考えて紹介していない。しかし，普段は考えない“重み付け”という作業を受け入れることは決して容易なことではなく，これを浸透させるにはもう少し時間が必要であると考えられる。

５．研修モデルによる教員研修の効果と考察

４．のように考えられる一方で，学期末にはスズキ校務での成績処理に関する質問を受ける機会も増えたのも事実である。ということは，スズキ校務で成績処理をする，またはしようとしている職員の数は確実に増加傾向にあると考えられる。これをいい機会とし，普及の呼びかけと成績処理方法の周知に努めていくことで，今後，より浸透していくと考える。

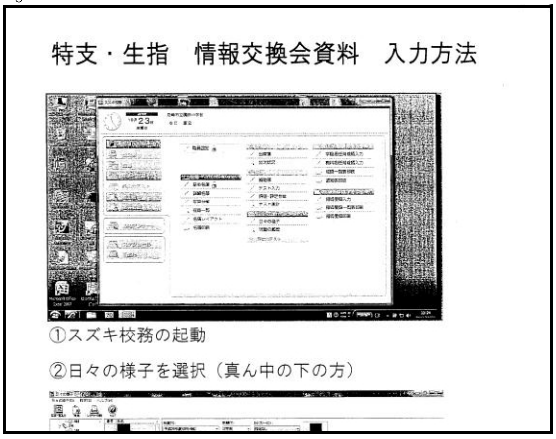
５　研究の成果と今後の課題

本年度，教育の情報化研究部会では，校内における校務の情報化を推進していくことを目標に，複数の研修モデルを開発，実践検証を行った。

個々の研修モデルを用いた実践検証では，研修内容について，概ね良好な理解を得ることができた。

研修後にスズキ校務の活用が特に進んだ例では，研修で具体的な数値を扱う等の演習を取り入れたことが効果的であったと思われる。しかし，スズキ校務の活用が進んだとしても，その活用効果を実感することができるようになるまでは，本当の意味で研修の効果があがったとは判断できないと考える。

今回の研修実践を通して，スズキ校務の活用に関する多くの具体的な意見・質問等が寄せられた。今後は，これらを参考に，より学校の実態に応じた研修を開発・検証していくことで，校務の情報化の推進に繋げていきたい。



*1「教育の情報化に関する手引」（文部科学省：平成２２年１０月２９日）

*2「学校情報セキュリティに関する研修モデルカリキュラム開発」（尼崎市立教育総合センター　紀要５０号：平成２５年３月）

平成２５年度　尼崎市立教育総合センター

専任講師

尼崎市立立花西小学校長	米田　浩
環太平洋大学教授	住本　克彦
奈良教育大学准教授	伊藤　剛和
大阪教育大学教授	木原　俊行
同志社大学　嘱託講師	遠藤　瑛子